The Molecular Biology Society of Japan
MBSJ NEWS
日本分子生物学会
会報
2008.2
No.89

目　次

■『Genes to Cells』へぜひ投稿を！ 1
―分子生物学会国際ジャーナル「Genes to Cells」編集長より現状報告と投稿のお願い―
■日本分子生物学会　第 8 回春季シンポジウム 2
「躍動する分子生物学―北の大地から」のご案内
■第 31 回日本分子生物学会年会・第 81 回日本生化学会大会 4
合同大会（BMB2008）開催のお知らせ（その 1）
■第 30 回日本分子生物学会年会　年会報告 8
■研究倫理委員会・若手教育問題ワーキンググループ報告 9
■第 15 期第 2 回理事会記録 14
■平成 20 年度（第 30 回）通常総会記録 20
■平成 18 年度（2006 年度）収支決算報告 23
■平成 19 年度（2007 年度）収支決算報告 25
■平成 20 年度（2008 年度）収支予算 29
■学術賞、研究助成の本学会推薦について 30
■研究助成一覧 30
■男女共同参画委員会活動報告 33
■会員管理システムへのアクセスのお願い 36
■各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ 37
○理研シンポジウム　第 3 回バイオ医工学シンポジウム
○遺伝子・デリバリー研究会　第 8 回シンポジウム
○第 11 回マリンバイオテクノロジー学会大会
■その他 39
○山田養蜂場　みつばち研究助成
■賛助会員芳名 40

特定非営利活動法人
日本分子生物学会
http://wwwsoc.nii.ac.jp/mbsj/

新会員管理システムへの移行に伴ない、新しい会員番号（数字６桁）が付与されております。昨年５月にご案内（ログインID・パスワードの発行通知）を郵送しておりますが、会員の皆様におかれましては、必ず、学会ホームページ上の会員管理システムにアクセスいただき、登録内容などのご確認をしてくださるようお願い申し上げます！

【詳細は本文 36 頁にあります】

http://wwwsoc.nii.ac.jp/mbsj/

特定非営利活動法人
日本分子生物学会　事務局

〒 102−0072　東京都千代田区飯田橋 3−11−5
20 山京ビル 11 階
TEL: 03−3556−9600　FAX: 03−3556−9611
E-mail: info@mbsj.jp

『Genes to Cells』へぜひ投稿を！
ー 分子生物学会国際ジャーナル「Genes to Cells」編集長より現状報告と投稿のお願い ー

分子生物学会会員の皆様

学会の機関誌である『Genes to Cells』は国際誌として富澤純一先生が創刊以来 12 年がすでに経過いたしました。これまでに約 1000 編の原著論文及び 70 編の Review（総説）を刊行いたしまして、国際的にもよく知られた存在となっております。皆様がご承知のとおり、学会会費のなかにオンラインでの購読料が含まれています。ログインして自由に読む読者としてだけでなく、投稿・発表して著者として、また投稿論文のレフェリーやさらにはエディターの役割を会員の皆様には担っていただいております。そういうわけで本誌はひろく世界に向かっている面と、一方で学会会員に役立つ面の両方での存在意義が常に問われているわけです。このご案内は、編集長を富澤先生より引き継いでおりますわたくしが、会員の皆様に『Genes to Cells』の現状をお伝えし、そしてあわせて投稿のお願いをするのが目的です。

出版社が昨年 Wiley-Blackwell 社に変更になりまして、契約の見直しなどもあり、財政面での状況は著しく改善されました。今年度は編集などの運営費が黒字になることが予想されております。これまで学会の財政に多大の負担をかけておりましたが、今後本誌がより多くの人々に読まれそして引用され、本誌がますます発展いたしますと、学会が半分の持ち分を持つということで、財政面の寄与も大きくなり会費の中に含まれているオンライン購読が無料になるのも夢物語ではなくなります。ぜひ、会員の皆様にも「自分たちのジャーナル」として『Genes to Cells』（http://www.blackwell-synergy.com/loi/gtc）に関心をもって頂きたくぞんじます。なお学会の会員であるので無料で読むことが出来ますが、ログインのしかたなどは学会のホームページ（http://wwwsoc.nii.ac.jp/mbsj/）からお入りください。なお学会ホームページから入るようになっている Highwire の『Genes to Cells』の本誌についての情報はかなり古いものなのでご注意ください。

投稿論文の内容につきましては、『Genes』と『Cells』を広くとっていただきましたら、どのような分子生物学のトピックも含まれると思います。内容的にしっかりした、長い時間経過に耐えられるような論文内容がこれまで多く発表されてきました。時代のさきがけになるような先駆的な研究は大歓迎ですし、競争の激しい分野での研究論文も出来るだけ早く公表されるように効率的な編集業務をするべく努力をしております。また、論文投稿に際し、担当の Editor を指定されてもされなくても同様に審査されます。投稿経験のあるかたで、『Genes to Cells』についてのご不満、ご意見などがございましたら、わたくし宛にメール（eic@genestocells.jp）でぜひお知らせください。

ジャーナルの評価の一つであるインパクトファクターは現在 3.5 強です。わたくしたちはこれを 5 程度にすることを目標の一つにしております。実際には 100 回以上引用されている論文が多数あることも事実で、優れた論文を発表して見逃されるようなことは絶対にありません。もう一つの評価であるオンラインでの論文ファイルのダウンロード数ですが、『Genes to Cells』は Synergy と Highwire の 2 つのオンラインサイトで読むことが可能なのですが、Synergy のほうだけでも昨年 2007 年一年間に 12 万回の論文ファイルのダウンロードがありました。12 年間の総発行論文数が 1000 であることを考慮すると『Genes to Cells』の論文がいかによく読まれているか、納得されるとおもわれます。2007 年中のダウンロード数を細かく見ますと、2007 年刊行の 1–12 月号について全部で 3 万回、10 年も前の 1998 年の論文に対しても 4 千回以上もありました。一年間で 100 報程度の総論文数であることを考慮すると現在の『Genes to Cells』の世界においての読まれ方、アクセスのされかたの高さがご理解されるかと思います。この読まれ方の高さが、引用の高さに結びつくようにするのが、わたくしたちの目標の一つです。

次回論文を投稿されるときに、ぜひ『Genes to Cells』もぜひ一つの候補として発表の場を考えてください。学会の若手の研究者には『Genes to Cells』にぜひ親近感を抱いて頂いて、自分たちのジャーナルとして考えていただきたい、と願っております。原著論文、レビューどちらにおいても投稿を歓迎いたします。

この 1 月半ばより Online 投稿サイトがバージョンアップし、従来に比べて投稿が著しく簡便になりました。投稿手順につきましては、Genes to Cells の HP（http://gtc.manuscriptcentral.com/）にてご確認ください。論文のレフェリーをする場合のアクセスなども容易になりました。

現在この雑誌の編集は、三人の編集アシスタントが主に業務を取り扱っておりまして、多くの日本人及び外国人の Editor の方たちにもご協力いただいております。『Genes to Cells』についてどのようなお尋ねにも対応しております。どうぞお気軽に質問などをしてください。メールアドレスは以下のとおりです。
Genes to Cells 編集室：office@genestocells.jp

それでは、皆様からのご投稿をお待ちいたしております。

2008 年 2 月
Genes to Cells 編集長　柳田　充弘
eic@genestocells.jp

日本分子生物学会　第８回春季シンポジウム「躍動する分子生物学ー北の大地から」のご案内

日本分子生物学会の平成 20 年度春季シンポジウムを 5 月に札幌にて開催いたします。開催主旨、計画および参加に関するご案内をさせていただきます。日本分子生物学会では、平成 13 年度から「春季シンポジウム」を開催することになり、今年で第 8 回を数えるに至りました。日本分子生物学会年会は毎年 12 月に開催されますが、その規模は年々巨大化し、生化学会との合同となった昨年度の参加者数は 1 万人を超えております。このため、年会は横浜、神戸、福岡のような大会場を持つ場所でしか開けない状況となっております。また、分子生物学が包含する研究対象・分野もきわめて広範囲となり、研究内容は専門化の一途をたどっております。こうした状況を補完するために「春季シンポジウム」がスタートいたしました。

札幌における今年度の「春季シンポジウム」は設立の趣旨にのっとり、日々進歩する分子生物学の様々な研究分野を包括的に理解し考える機会をもつことを目的に開催いたします。そのため、シンポジウムでは講演を一会場に限定し、世界に誇る分子生物学研究を先鋭的に進めておられる第一線の研究者の方々にホットでエキサイティングな講演をしていただきます。研究分野がどれほど細分化されようとも、異分野を納得させる優れた研究には共通するロジックや広く適用可能なアプローチ法が存分に満ち溢れています。世界をリードする研究とは何なのか、他の研究とは質的にどこが異なるのか、自分の研究にどのように還元できるのか、最先端の研究成果と活気ある議論が展開される中で、是非、その答えを探してみていただきたいと思います。札幌の 5 月は清々しい季節です。本シンポジウムでは、大学院生を含めた若手研究者が講演講師と積極的に交流できる場を提供することも大きな目的のひとつにしており、このためのポスターセッションならびにミキサー・懇親会を予定しております。全国からの多くの若手研究者・学生の皆様の参加を期待しています。なお、前日の 5 月 25 日には分子生物学の楽しさ、素晴らしさを一般の方々に知っていただく市民公開セミナー「最先端の分子生物学は蘊蓄（うんちく）の宝庫！」を開催する予定です。

開催期間：2008 年 5 月 25 日㈰から 27 日㈫までの 3 日間。
初日の 25 日は午後から市民公開講座を行い、翌日からシンポジウムを開催いたします。

開催場所：京王プラザホテル札幌
〒 060-0005　札幌市中央区北 5 条西 7 丁目
（JR 札幌駅より徒歩 5 分）
TEL：011-271-0111　FAX：011-271-1101
http://www.keioplaza-sapporo.co.jp/

会　　場：講演…京王プラザホテル　プラザホール
ポスターセッション…
京王プラザホテル　ペガサス／チェリー

プログラム：

25 日㈰　14：00～16：00　市民公開講座
26 日㈪　08：45～18：15　招待講演とポスターセッション
27 日㈫　09：00～16：30　招待講演・特別講演

市民公開講座

鍋島　陽一（京都大学）
「健康な体を維持する仕組み」
藤山　秋佐夫（国立情報学研究所）
「ゲノムが教えてくれる生物のすがた」

特別講演

喜田　宏（北海道大学）
「インフルエンザウイルス遺伝子の起源と進化」

招待講演

Cutting Edge−極性／運動
大野　茂男（横浜市立大学）
「細胞の極性とその制御機構」
高井　義美（神戸大学）
「細胞の形態形成の基本メカニズム」
Cutting Edge−発生／再生
丹羽　仁史（理化学研究所）
「胚性幹細胞の多能性を維持する分子機構」
高橋　淑子（奈良先端大）
「血管の 3 次元構築における細胞移動と Notch シグナル」
Cutting Edge−細胞周期
大隅　圭太（東京工業大学）
「脊椎動物の未受精卵における減数分裂停止と受精によるその解除」
荒木　弘之（国立遺伝学研究所）
「真核生物染色体 DNA の複製開始機構」
Cutting Edge−細胞死
長田　重一（京都大学）
「アポトーシス細胞の貪食」
水島　昇（東京医科歯科大学）
「オートファジーによる大規模分解の多彩な役割」

Cutting Edge−生体防御

谷口　維紹（東京大学）

「免疫と発がんを繋ぐシグナル伝達と遺伝子発現」

審良　静男（大阪大学）

「自然免疫における病原体認識とシグナル伝達」

Cutting Edge−癌

間野　博行（自治医科大学）

「肺癌における融合型チロシンキナーゼの発見：固形腫瘍における染色体転座」

油谷　浩幸（東京大学）

「がんの統合的ゲノム解析：ゲノムからエピゲノムへ」

Cutting Edge−神経

柚崎　通介（慶應義塾大学）

「神経系における新しいシナプス形成・可塑性制御因子−C1q ファミリー分子群」

狩野　方伸（東京大学）

「内因性カンナビノイドによる逆行性シナプス伝達調節」

参加申込：

平成 20 年 5 月 10 日まで。

参加申込およびポスター発表申込の詳細は、日本分子生物学会第 8 回春季シンポジウムのホームページ（http://www.igm.hokudai.ac.jp/oncology/mbsj2008/）をご覧ください（日本分子生物学会ホームページからリンクしてご覧になれます）。

参加費：無料

ミキサー・懇親会費：5000 円

（学生・大学院生は 1000 円）

2008 年度春季シンポジウム世話人

北海道大学遺伝子病制御研究所分子腫瘍分野

畠山　昌則

札幌市北区北 15 条西 7 丁目

TEL：011−706−5527

FAX：011−706−7544

e-mail: mhata@igm.hokudai.ac.jp

第 31 回日本分子生物学会年会・第 81 回日本生化学会大会 合同大会（BMB2008）開催のお知らせ（その 1）

第 31 回日本分子生物学会年会は、昨年に引き続き、今年も日本生化学会との合同大会として開催いたします。

日本の生命科学分野を代表する二つの学会が、それぞれの学会の特色を活かしつつ、合同大会として魅力ある充実した内容となるよう、企画・準備を進めています。

会員の皆様より多くのご参加をいただきますよう、お待ちしております。

会　　期	：2008 年 12 月 9 日㈫～ 12 日㈮（4 日間）
会　　場	：神戸ポートアイランド （神戸ポートピアホテル、神戸国際会議場、神戸国際展示場、ワールド記念ホール）
大　　会　長	：第 31 回日本分子生物学会年会　年会長　長田 重一（京都大学大学院医学研究科） 第 81 回日本生化学会大会　　会　頭　大隅 良典（基礎生物学研究所）
演題登録期間	：2008 年 7 月 1 日㈫～ 7 月 15 日㈫予定
事前参加登録期間	：2008 年 7 月 1 日㈫～ 10 月 31 日㈮予定
	＊サーバーメンテナンスの関係で、若干前後する可能性もあります。

○プログラム（予定）

プレナリーレクチャー

Paul Nurse（The Rockefeller University, 米国）

H. Robert Horvitz（Massachusetts Institute of Technology, 米国）

F. Ulrich Hartl（Max Planck Institute of Biochemistry, ドイツ）

Aaron Ciechanover（Technion-Israel Institute of Technology, イスラエル）

○シンポジウム

約 75 テーマを開催予定。組織委員会の企画による下記のほか、約 20 テーマを会員から公募します。募集要領は後述の『シンポジウム公募について』をご参照ください（公募締切：2008 年 3 月 21 日㈮）。

なお、本大会では、ワークショップは開催いたしません。

糖質生物学

糖鎖による細胞膜機能の制御（仮題）　古川 鋼一（名大・医）、木下 タロウ（阪大・微研）（依頼中）

糖鎖を中心とした病態生化学　三善 英知（阪大・医）、鈴木 匡（理研・フロンティア）

脂質生物学

脂質と細胞機能　梅田 真郷（京大・化研）、新井 洋由（東大・薬）

リン脂質シグナリングと生体膜のダイナミクス　伊藤 俊樹（神戸大・医）、佐々木 雄彦（秋田大・医）

脂質メディエーター　横溝 岳彦（九大・医）、村上 誠（都臨床研）

構造生物学から見た蛋白質機能（仮題）（オーガナイザー依頼中）

タンパク質

細胞内タンパク質機能発現システム研究の最前線（仮題）　田口 英樹（東大･新領域）、阪口 雅郎（兵庫県大･生命理）

蛋白質分解（仮題）　小松 雅明（順天堂大・医）、村田 茂穂（東大・薬）

酵素、代謝調節、栄養

生命維持に必須な代謝調節機構　岩井 一宏（大阪市大・医）、末松 誠（慶應大・医）

拡大する品質管理の概念　遠藤 斗志也（名大・理）、稲田 利文（名大・理）

細胞応答

リン酸化と細胞応答　名田 茂之（阪大・微研）、山梨 裕司（東医歯大・難治研）

低分子量 G 蛋白による細胞運動と膜輸送の制御　松田 道行（京大・生命）、匂坂 敏明（神戸大・医）

イオンチャネル研究の新たな潮流（仮題）　久保 義弘（生理研）、岡村 康司（岡崎統合バイオ）

トランスポーターが拓く新しい生物システム　森山 芳則（岡山大・医歯薬）、柿沼 喜己（愛媛大・農）

核内受容体の機能　加藤 茂明（東大・分生研）、諸橋 憲一郎（基生研）

細胞の構造と機能

細胞接着（細胞間、細胞基質間）（仮題）　古瀬 幹夫（神戸大・医）

細胞骨格の創造から機能発現まで　渡邊 直樹（京大・医）、武谷 立（九大・生医研）

メンブレントラフィック（仮題）　吉森 保（阪大・微研）

膜ドメイン研究の新展開　藤本 豊士（名大・医）、小林 俊秀（理研・中研）

オルガネラダイナミクス－形成・分解と機能制御　岡 敏彦（九大・医）、阪井 康能（京大・農）

細胞周期（仮題）　岸本 健雄（東工大・生命理工）、中山 敬一（九大・生医研）

細胞死の生体機能と制御　三浦 正幸（東大・薬）

核輸送と生命機能制御のインターフェイス（仮題）　米田 悦啓（阪大・生命／医）

ゲノムと遺伝情報

細胞核と染色体のダイナミクス　髙橋 考太（久留米大・分生研）、木村 宏（阪大・生命）

non-coding RNA（仮題）　塩見 春彦（徳島大・ゲノム研）

ストレス応答と転写因子　山本 雅之（東北大・医）、深水 昭吉（筑波大・TARA セ）

時計遺伝子の多彩な機能　岡村 均（京大・薬学）

超高速シーケンサーとバイオインフォマティクス　森下 真一（東大・新領域）、鈴木 穣（東大・新領域）

DNA 複製・組み換え（仮題）　石川 冬木（京大・生命）、升方 久夫（阪大・理）

組織特異的スプライシングの分子機構　萩原 正敏（東医歯大・疾患生命）、前田 明（藤田保衛大・総医研）

左右形成の分子機構　岩里 琢治（理研・脳研）、相澤 秀紀（理研・脳研）

転写シグナリングと複合体ダイナミクスの新展開（仮題）　五十嵐 和彦（東北大・医）、伊東 健（弘前大・医）

ゲノムの安定性と多様化を制御する分子機構　菅澤 薫（神戸大・バイオ研）、益谷 央豪（阪大・生命）

神経科学

中枢神経細胞再生の分子メカニズム　山下 俊英（阪大・医）、荒木 敏之（国立精神・神経セ・神経研）

シナプス研究－分子から個体機能へ　岡部 繁男（東大・医）、能瀬 聡直（東大・新領域）

神経細胞の極性形成機構（仮題）　貝淵 弘三（名大・医）

発生と再生

組織幹細胞とニッシェ　長澤 丘司（京大・再生研）、吉田 松生（京大・医）

生殖細胞の発生（仮題）　小林 悟（岡崎統合バイオ／基生研）、松居 靖久（東北大・加齢研）

細胞極性をつくる微小管ダイナミクス　杉本 亜砂子（理研・発生・再生研）、大浪 修一（理研・ゲノム研）

ES 細胞研究の最前線（仮題）　山中 伸弥（京大・物質－細胞統合システム拠点／再生研）

器官形成における細胞移動　高橋 淑子（奈良先端大・バイオ）

システムバイオロジー

システムバイオロジー：ネットワークの動的な性質が生み出す生命機能　黒田 真也（東大・理）、近藤 滋（名大・理）

ネットワーク解析　宮野 悟（東大・医科研）、堀本 勝久（産総研）

疾患生物学

免疫監視機構の破綻と疾患（仮題）　岡崎 拓（京大・医）、堀 昌平（理研・免疫・アレルギー研）

細胞老化と疾患　原 英二（徳島大・ゲノム研）、小室 一成（千葉大・医）

神経変性疾患関連遺伝子探索と機能解析　垣塚 彰（京大・生命）、高橋 良輔（京大・医）

骨疾患と信号伝達　熊ノ郷 淳（阪大・免疫フロンティア）、高柳 広（東医歯大・医歯）

新たなステージに入ったがんオミクス研究　髙橋 隆（名大・医）、稲澤 譲治（東医歯大・難治研）

感染症研究の新展開　竹田 潔（阪大・医）、松浦 善治（阪大・微研）

代謝と老化　伊村 明浩（京大・医）、槇島 誠（日本大・医）

植　物

メリステムによる植物発生のダイナミズム　荒木 崇（京大・生命）、町田 泰則（名大・理）

植物発生における軸形成機構（仮題）　東山 哲也（名大・理）、澤 進一郎（東大・理）

バイオテクノロジー

生命システムの階層間をまたぐイメージング技術（仮題）　野地 博行（阪大・産研）、永井 健治（北大・電科研）

ケミカルバイオロジーの展望　浜地 格（京大・工）、三原 久和（東工大・生命理工）

プロテオミクス研究最前線　五島 直樹（産総研・生物情報）、長瀬 隆弘（かずさ DNA 研）

○一般演題（口頭発表・ポスター発表）

演題登録期間：**2008 年 7 月 1 日㈫～ 7 月 15 日㈫（予定）**

本大会の一般演題は、一般口頭発表（採択）とポスター発表となります。

演題登録に関する詳細は、日本分子生物学会「会報」（90 号･6 月発行予定）･日本生化学会「生化学」誌（80 巻 5 号･5 月発行予定）および決定次第 BMB2008 ホームページにてお知らせいたします。

なお、口頭発表へ採択された一般演題は、ポスター発表との両方の発表を行っていただく予定です。

演題の申し込みには、日本分子生物学会（または日本生化学会）の会員であることが必要です。

未入会の方は早目に入会手続きを済ませてください。

○バイオテクノロジーセミナー（ランチョンセミナー）
○男女共同参画企画
○日本分子生物学会総会、三菱化学奨励賞授賞式・受賞講演、日本生化学会柿内賞受賞講演、奨励賞受賞講演 等
○機器・試薬・書籍等展示会

○シンポジウム公募について

応募締切日：2008 年 3 月 21 日㈮

1 テーマあたり 3 時間の時間枠で、約 20 テーマを採択します。

演者につきましては、オーガナイザーにてご指定の指定演者のみとなります（一般演題からの採択は行いません）。ご提出いただいたシンポジウム企画は、厳正なる審査の上、採否を決定いたします。採否結果は 4 月末頃に応募者へご連絡いたします。

なお、ご提案をいただくオーガナイザーは、両名とも日本分子生物学会（または日本生化学会）の会員に限ります。

また、公募シンポジウムにおいて海外演者を招聘する場合、1 テーマにつき 100,000 円以内の旅費の補助を支給する予定です。海外演者（海外在住の日本人を除く）がシンポジストに含まれる場合、そのシンポジウムの言語は英語にてお願いします。国内演者については、旅費、宿泊費、謝金等はお支払いすることが出来ませんが、非会員演者は参加登録のみをご招待といたします。

その他ご不明な点がありましたら、下記大会事務局までお問い合わせ下さい。

たくさんの企画のご提案をお待ちしております。

【シンポジウム企画公募 応募要領】

下記事項をご記入のうえ、3 月 21 日㈮までに下記大会事務局まで E-mail にてご提出ください。

1）テーマタイトル
2）オーガナイザーの氏名・所属（2 名）
3）概要（400 字程度）
4）予定演者案（氏名・所属等）
5）連絡窓口となるオーガナイザーの氏名および連絡先（〒、住所、所属、TEL、FAX、E-mail）
6）両オーガナイザーの所属学会（日本分子生物学会・日本生化学会）
7）予想される聴衆数

BMB2008 に関するお問合せ
BMB2008（第 31 回日本分子生物学会年会・第 81 回日本生化学会大会 合同大会）事務局
〒 532-0003 大阪市淀川区宮原 4-4-63 新大阪千代田ビル別館 9 階
Tel：(06)-6350-7247　Fax：(06)-6350-7248　E-mail：bmb2008@aeplan.co.jp
URL：http://www.aeplan.co.jp/bmb2008/

【BMB2008 組織委員一覧】

○組織委員会

〈大会長〉

第 31 回日本分子生物学会年会　年会長
長田　重一（京都大学大学院医学研究科）

第 81 回日本生化学会大会　会頭
大隅　良典（基礎生物学研究所）

〈プログラム委員長〉

第 31 回日本分子生物学会年会　プログラム幹事
松田　道行（京都大学大学院生命科学研究科）

第 81 回日本生化学会大会　プログラム幹事
貝淵　弘三（名古屋大学大学院医学研究科）

〈庶務幹事〉

第 31 回日本分子生物学会年会　庶務幹事
米田　悦啓
（大阪大学大学院生命機能研究科／医学系研究科）

第 81 回日本生化学会大会　庶務幹事
遠藤斗志也（名古屋大学大学院理学研究科）

○プログラム委員会

糖質生物学
古川　鋼一○　三善　英知

糖質生物学
梅田　真郷○　伊藤　俊樹

タンパク質
白川　昌宏○　田口　英樹

酵素、代謝調整、栄養
岩井　一宏○　末松　　誠　反町　洋之

細胞応答
菊池　　章○　三木　裕明

細胞の構造と機能
月田早智子○　稲垣　昌樹　吉森　　保

ゲノムと遺伝情報
石川　冬木○　荒木　弘之　塩見　春彦
菅澤　　薫　　諸橋憲一郎

神経科学
山下　俊英○　深田　吉孝

発生と再生
松崎　文雄○　高橋　淑子

システムバイオロジー
黒田　真也○

疾患生物学
竹田　　潔○　髙橋　　隆　髙橋　良輔

植物
島本　　功○　東山　哲也

進化
山岸　明彦○

バイオテクノロジー
森　　泰生○　永井　健治　根本　知己

○印のプログラム委員は各分野における幹事

第 30 回日本分子生物学会年会　年会報告

第 30 回日本分子生物学会年会は、第 80 回日本生化学会大会との合同大会（BMB2007：Biochemistry and Molecular Biology 2007）として、昨年 12 月 11 日㈫〜15 日㈯の 5 日間、パシフィコ横浜と横浜グランドインターコンチネンタルホテルを会場に開かれました。年会の参加登録者は、11,757 名で、海外演者や非会員の講演者を加えると 12,000 名を超える参加者がありました。

生化学会との合同大会ということで、会期は例年より一日長く 5 日に亘り、その間に特別講演 4 題、マスターズレクチャー 11 題、シンポジウム 49 テーマ 271 題、ワークショップ 80 テーマ 615 題（うち指定 438 題）、フォーラム 5 テーマ、一般演題 5,581 題（うちワークショップ採択 177 題、一般口頭発表採択 1,120 題、ポスター発表のみ 4,284 題）の合計 6,482 題が発表され、活発な議論と情報交換が行われました。また、最終日に開催した公開講座「日本から発信する生命科学の最先端」には、1,000 名を超える聴衆で会場があふれるなど、最後のプログラムまで大変多くの方々にご参加をいただきました。日本の生命科学を推進する代表的な二つの学会が合同して年会を開催することで、迫力と活気に満ち溢れた年会となったといえます。展示・バイオテクノロジーセミナーについても、展示 272 社 502 小間、バイオテクノロジー 32 社 34 セミナーと多くの企業からご参加をいただき経済面および情報面で大変大きな恩恵となりました。

近年分子生物学は様々な研究領域、手法が融合しながら発展を見てきました。年会は研究者に交流と情報交換の場を提供することで、その発展を促進する役割を持っています。今年は生化学会との合同年会ということで、脂質代謝やケミカルバイオロジーといった生化学会の特徴と分子生物学会に特徴的な分子遺伝学やゲノム科学、更にはシステムバイオロジーまでのより広い領域をカバーする新たな情報交換の場ができました。生命科学という共通の課題を対象にする二つの学会の会員が集まり情報を共有することは、我が国の生命科学の進展に大きく貢献するものであり、BMB2007 がそのためにいくらかでも役割を果たせたとすれば幸甚です。

5 日間の会期は長すぎるという意見もあります。また参加者が 1 万人を超すのでは交流がうまく進まないという声も聞きました。また、プログラム集の人名索引において、シンポジウムとワークショップの筆頭演者の姓と名とが逆になって掲載されてしまったことや、出来るだけ会場の規模と席数を増やすよう努力したにも関わらず、一部には立見や会場内に入ることができない聴講者が出た会場もあり、ご不便をお掛けしました。これらの不行き届きを深くお詫びいたしますとともに、様々に工夫することで今後もよりすばらしい年会が開催されることを願っております。

最後に、本合同大会の成功を支えてくださった本学会の役員、生化学会大会会頭をはじめ合同大会組織委員、プログラム委員、一般演題編成委員、推進委員の方々、講演者、参加者各位と、本大会にご理解を賜りご援助をいただきました多数の関連企業の方々に、そしてまたBMB2007 事務局に心よりお礼を申し上げます。

平成 20 年 1 月 28 日

第 30 回日本分子生物学会年会（BMB2007）

年会長　山本　　雅

研究倫理委員会・若手教育問題ワーキンググループ報告

去る平成19年12月13日㈭にパシフィコ横浜において、分子生物学会・若手教育シンポジウム『今こそ示そう科学者の良心―みんなで考える科学的不正問題』が行われた。本シンポジウムは、3名の講演（第一部）とパネルディスカッション（第二部）で構成され、約300名の参加者があった。議論は大いに盛り上がり、参加者からは概ね好評を得たが、同時に多くの問題提起もなされた。本稿では、このシンポジウムの概略とアンケート結果に基づいた客観的分析、さらに今後の若手教育のあり方について述べる。

（文責：若手教育問題ワーキンググループ座長　中山　敬一）

まず本題に入る前に、本シンポジウム開催までの背景について簡単に述べておきたい。近年、国内外においてセンセーショナルな論文捏造問題が明らかになり、科学者自身による問題の検証と対策の立案･施行を行うべく、ライフサイエンス関係における最大の学会の一つである日本分子生物学会に研究倫理委員会（柳田充弘委員長）が設置された。この委員会の主たる使命は、過去における問題の検証と、将来における問題の防止であり、それぞれにワーキンググループ（論文調査ワーキンググループと若手教育問題ワーキンググループ）が下部組織として結成された。

若手教育問題ワーキンググループにおける大きな活動目標の一つは､科学的不正防止のための啓発活動である。もちろん具体的かつ有効な教育方法の確立が最終目標であるが、まずはこのような問題に若手研究者の目を向けさせ、学会として真剣に改革に取り組んでいる姿を公に示すことこそが喫緊の課題であると考え、初年度はなるべく話題性の高い方策を考案し、実行することに砕心した。そこで多くの方に興味を持ってもらうために、年会における企画とメディアの活用を念頭に、次の三部作を考案した（メディアは数社に問い合わせた中で、無償でページの提供をいただいた「細胞工学」誌に今回はお願いすることとした)。

●「細胞工学」誌上座談会「徹底討論！科学的不正問題を斬る―これでいいのか研究者！」（細胞工学2007年12月号）
●年会・分生若手教育シンポジウム『今こそ示そう科学者の良心―みんなで考える科学的不正問題』（第30回日本分子生物学会年会2007年12月13日）
●「細胞工学」誌学会探訪記事『分生若手教育シンポジウムに参加して』(細胞工学2007年3月号印刷中)

Ⅰ．シンポジウムの概要

（座長：山中　伸弥、中山　敬一）

（※シンポジウム内容の全文は分子生物学会のWEBサイトに掲載していますので、そちらも是非ご覧下さい。きっと臨場感溢れる追体験ができるものと思います）

【第一部：講演】

研究者の立場から：柳田　充弘氏（京都大学）

「研究者の良心、とは何なのだろうか」

研究者を取り巻く環境は、昔と違って社会に組み込まれた存在になっており、それゆえ必然的に説明責任が生じる時代となった、と柳田氏は話す。そのきっかけとなったのは、分子生物学会の年会長を務められたこともある杉野元教授の問題だったという。『例えば一部のサッカー選手が、審判の見えないとこでなら違反行為をやるけれども、見えるところではやらないように、研究者にもそれに近い人がいる』ことを前提とするとき、そこで必要となるのはやはりルールであろう。しかしながら問題は実に千差万別で、1つの事例でマニュアル的にほかのものも同じようにできるほど、事は簡単ではない。結局『良心』や『正直』こそが大切であり、研究者は過ちを犯す種族だ、ということを自覚しなくてはならない。しかしここで注意したいのは、過ちと不正行為は全くの別物であり、それをきちんと分けられていないところに問題がある、と柳田氏は述べられた。過ちは正直に認めて訂正すれば全く問題ない、という土壌がなかなか育たない、それこそが問題であると感じた。

行政の立場から：菱山　　豊氏（文部科学省）

「研究上のいわゆる不正行為と行政の役割」

菱山氏は、基本的に研究不正の問題について、『行政が前面に出ることは、あまり望ましくない』という基調で講演された。これは行政の責任回避ではなく、あくまで研究者が主体となり、自己努力の中で問題を解決していく方策を考える姿勢がいちばん望ましいという、研究者に対するエールであると感じられた。文部科学省の対応としては、平成18年に「研究活動の不正行為に関する特別委員会」が設置され、同年の8月に報告書が作成されたことを述べられた。その中では、現在の研究者を取り巻く環境、特に研究の先陣争いや競争的資金の獲得における競争的な意識の過剰が問題であること、若い研究者が、研究の作法や倫理について十分教育を受けていない現状などが問題として

挙げられている。さらに日本学術会議には「行動規範に関する検討委員会」が設置され、科学者の行動規範を作成していることについても触れられた。

マスコミの立場から：村松　秀氏（NHK）

「『論文捏造』と科学の変容　～番組取材の現場から～」

NHK科学番組担当のディレクターの村松氏は「論文捏造（ねつぞう）」（中公新書ラクレ）[筆者註]執筆と関連番組を制作し、2007年の科学ジャーナリスト大賞に選ばれるなど、この問題に関する第一人者である。講演では、2002年にアメリカ・ベル研究所で起こった史上最大の捏造事件（いわゆるシェーン事件）を取り上げ、その背景と経過、そして教訓などを非常にわかりやすくお話しいただいた。具体例を提示しながら問題点を抽出する手法には説得力があった。最後の『科学は日本橋だ！』という比喩（日本橋は明治以降大きくその姿を変えており、科学も同様なのにもかかわらず、研究者の意識は明治のまま）もまた印象的であった。さらに耐震偽装や食品偽装など、科学者でない人が科学をなめている最近の風潮を「なめられる科学」として問題提起されており、科学者サイドとしても大いに考えさせられる内容であった。

筆者註）単に事実が書いてあるだけでなく、その背景や真実に迫っていく過程はミステリーの謎解きのような迫真の面白さがあり、読み物としても大変面白い。是非、一読されることをお勧めする。

【第二部：パネルディスカッション】

パネルディスカッションはワーキンググループの6名の委員（加藤茂明、水島昇、山中伸弥、上田泰己、高橋考太、中山敬一）で分生の将来と若手の教育について、相互および会場と意見を交換した。以下に主要な話題・意見を抜粋する。

- 競争の激化が研究者にプレッシャーを与え、それによって捏造を誘発する危険があるのではないか。特に論文のリバイスのときが危険なのでは。
- 研究室がタコツボ化している。自分の育ったラボの価値観しか知らず、ボスの規範意識がそのまま若手研究者に伝えられていく。
- PIになったときに、PIとしての教育をされていない。
- 精神的に全く別次元の「病気」の人がいることは確か。その一方で小悪事から次第に感覚が麻痺して悪性化しているケースもあるのでは？
- フォトショップの問題に関しても、例えばコントラストをいじっていいかどうかということは、ちゃんと投稿規程には書いてある（変更すること自体は捏造ではない）。
- corresponding authorが責任を取る仕組みを、きちんと科学者の中で確立していかないと、分野自体がしぼんでしまう。
- 共同研究者の責任について、「自分は共同研究者だから知らない」と言ってそれで済むならそんなに楽なことはない。
- 学生が捏造していた場合と、ポスドクやスタッフがそういうことを行った場合っていうのは、corresponding authorの責任もちょっと違うのでは。ポスドクとはある程度対等だが、学生の場合はPIが教育しなければいけない立場にあるので、自ずと責任も異なってくるだろう。
- corresponding authorは捏造事件があったら切腹（する位の覚悟）で臨むべき。
- 倫理観の標準から完全に外れている人は教育する手段がない。
- 科学者として間違ったことをやったら、次第に国際的に認められなくなり、やがて研究の世界では生きていけなくなるということを若い人達に伝えていくことが大切。
- 我々思っているような普通のモラルと全然別なモラルで科学をやっている人がいて、こういう人は決して捏造を認めない。
- だれが見てもこれは恥ずかしいし、もう自分は研究やってく資格がないと思ったら、それは辞めるのもいいかも知らんけども、ケース・バイ・ケースがものすごく違うので、多くの場合、ちょっと状況は違うと思う。
- 不正の具体例をわかりやすく提示して教育すべき。
- このような問題に突き当たったときに、誰がそれをやるかが問題。皆とても忙しい。専門家組織を作るべきではないのか。
- 米国のORI（Office of Research Integrity）のような組織を行政主導で作ることも検討すべき。
- 行政にそれを依頼するのは丸投げではないか。
- 罰則論みたいなネガティブな教育だけではなくて、他人のアイデアを尊重しながら自分のデータに対して誇りを持つようなポジティブな教育も必要。
- 何らかの具体的なルール作りや簡単な例を提示することが必要であろう。
- 研究不正をすることは、とても恥ずかしいことであるという意識を持てるようなコミュニティーを作りたい。

Ⅱ．アンケート結果

（アンケート回収数：171 名）

問１　あなたの年齢は？
① 30 歳未満 …… 33%
② 30 ～ 34 歳 …… 20%
③ 35 ～ 39 歳 …… 10%
④ 40 ～ 44 歳 …… 15%
⑤ 45 ～ 49 歳 …… 11%
⑥ 50 ～ 59 歳 …… 8%
⑦ 60 歳以上 …… 4%

問２　あなたの性別は？
① 男性…… 73%
② 女性…… 27%

問３　あなたの現在の所属機関は？
① 国公立大学…… 59%
② 私立大学…… 16%
③ 官庁系研究所・病院…… 11%
④ 企業…… 11%
⑤ その他…… 3%

問４　あなたの現在の身分・職階は？
① 学部学生…… 2%
② 大学院生（修士）…… 9%
③ 大学院生（博士）…… 17%
④ ポスドク…… 11%
⑤ 大学教員（助教・講師・准教授）…… 25%
⑥ 大学教員（教授）…… 11%
⑦ 研究員…… 9%
⑧ 主任研究員・チームリーダー・室長以上…… 7%
⑨ その他…… 9%

問５　あなたは PI（Principle Investigator：ラボの主宰者）ですか？
① はい…… 17%
② いいえ…… 75%
③ 場合による…… 7%
④ わからない・未記入…… 1%

問６　このシンポジウムを何で知りましたか？（複数回答）
① 学会ホームページ…… 26%
② ポスター…… 10%
③ 学会会報…… 27%
④ 会場内の広告…… 7%
⑤ 細胞工学…… 8%
⑥ 他人に聞いた…… 15%
⑦ その他…… 7%

問７　細胞工学 12 月号「徹底討論！論文捏造問題を斬る―これでいいのか研究者！」をご覧になりましたか？
① 読んだ…… 20%
② 内容をちらっと見た…… 11%
③ タイトルを見たが読んでいない…… 15%
④ 知らなかった…… 54%

問８　このシンポジウムの感想をお教え下さい。
① とても面白かった…… 46%
② まあまあ面白かった…… 39%
③ 普通…… 6%
④ あまり面白くなかった…… 1%
⑤ つまらなかった…… 0%
⑥ その他・未記入…… 9%

問９　このシンポジウム時間の長さはどうでしたか？
① 長すぎる…… 7%
② 適当…… 77%
③ 短すぎる…… 9%
④ 未記入…… 8%

問 10　今後このような試みを続けるべきだと思いますか？

① 是非続けるべき…… 80%
② 続けるべきだが方法を変えた方が良い…… 11%
③ 止めた方が良い…… 0%
④ わからない・未記入…… 9%

問 11　ご意見・ご感想・今後取り上げて欲しいテーマなど（一部抜粋）

【第一部：講演会について】
・行政の人には単なる事例ではなく行政や演者の考えをその立場から語って欲しかった
・ＮＨＫの番組は見たことがあるが再びまとめの形で聞かせていただき大変興味深かった

【第二部：パネルディスカッションについて】
・テーマごとのディスカッションが必要
・時間を長くして欲しい

【今後取り上げて欲しいテーマ】
・学生の教育について
・技術的な問題について
・精神性と倫理観について
・制度上の問題について
・生命科学と社会とのつながりについて
・大学の体制と行政の役割について

【ご意見など】
（将来に方策に関するもの）
・具体的な事例を集めてわかりやすく報告して欲しい
・ＰＩを目指す人向けに学会で教育プログラムのようなものを作って欲しい
・教育や科学に必要なことなら同じようなテーマであっても何回でもやった方が良い
・ＮＩＨのように若手研究者へのオリエンテーションをシステム化する必要性を考える時期
・不正を取り締まるだけでなく、研究動向なども見て提言するような第三者組織を作って欲しい
・第三者機関にも疑問があるため、現実的にはスタッフ増員など事務がまわる環境を整備すべき

（教育対象に関するもの）
・議論する場をネット上に作ってはどうか
・会員全体が参加できるようにしてもらいたい
・若手よりも教授クラスに参加させるようにしたらどうか
・もっと学生に聞かせるべき
・市民からの意見も年会の期間中に聞けたら嬉しい
・危機感を持っていない人にどう対応するかを考えて欲しい

（原因論に関するもの）
・不正のほとんどが教育のなさが原因ではないかと感じた
・科学が経済活動となった今、取り締まりや罰則などのしめつけが必要

（開催する時間帯などに関するもの）
・誰もが参加できる時間帯に開催して欲しい
・ポスターセッションの時間帯と重ねるべきではない重要なテーマである
・ポスターセッション終了後に参加したので前半を聞けず残念
・終了時間を早くして欲しい

（その他：ポジティブな感想）
・たいへん有意義な時間だった
・また開催して欲しい
・ちゃんと考えていることを知れただけでも感心した
・科学を取り巻く社会全体で議論すべき問題なので定期的機会があるとたいへん有意義だと思う
・不正の起こる背景やそれに対する対処の難しさなどが整理できて勉強になった
・捏造に対する意識が高まったのでとても良い機会だった
・重要だが無視しがちな問題に正面から取り組む機会を提供するという点で貴重なものだと思う
・研究者が解決に向けて真剣に取り組んでいることを広告するためにも活動を続けて欲しい
・ＢＭＢ 2007 で最も興味深くて自らの役に立ったシンポジウムだった

（その他：ネガティブな感想）
・パネルディスカッションは面白かったが個々のプレゼンはあまり意義が感じられなかった
・難しいとは思うが具体的な主張がないと感じた
・具体的対策についての意見は様々あるはずだが出し切れていない
・興味深いシンポジウムだったがなかなか出口が見えない気がする

Ⅲ．アンケート結果に対する分析

1）「若手教育」と銘打ってあるので、参加者年齢は 30 歳以下が半数以上を占めるだろうという予想だったが、実際は 30 歳以下が約 1/3 であり、広い年代にわたって参加が認められた。これは、この科学的不正問題が「教育される」側だけの問題ではなく、「教育する」側にとっても非常に深刻な問題であるという受け止め方をされていることを示すものであると考えられる。

2）身分・職階については、大学院生（修士・博士）が 26%、ポスドク・研究員 20％、助教・准教授クラス 25％、教授・主任研究者クラス 18％の内訳であった。これを PI・non-PI で分けると、PI：non-PI = 2：8 程度であり、幅広い参加が認められた。本シンポジウムの目標の一つには PI の教育も含まれているため、この程度の割合は妥当なものだと思われる。

3）このワーキンググループ活動の目的の一つが啓発活動にあることを考えると、催事の周知方法は非常に重要な項目である。今回の参加者の約半数は、学会ホームページか会報によってこのシンポジウムの存在を認知しており、ホームページと会報の利用が非常に効果的であることが判明した。それに対して全国に配布したポスターの効果は 10％、直前に掲載された細胞工学記事によって知った人は 8％であり、意外に少なかった。

4）このシンポジウムに人を集める手段として期待していた細胞工学 12 月号記事「徹底討論！科学的不正問題を斬るーこれでいいのか研究者！」については、約 3 割の参加者しか読んでいないことがわかった。今後より広い読者に対して意見発信をする方法を考えるべきである。

5）シンポジウムに対する感想では、「とても面白かった」「まあまあ面白かった」が 85％を占めた。特に前者の方が後者よりも高い数字を出すことは、通常のアンケートでは珍しいことであり、初年度の取り組みとしての本シンポジウムは参加者の興味という点では一応合格点であると考えられた。つまらない正論を我慢して聴くスタイルだと啓発活動は成功しない。

6）シンポジウムの開催時間については、本ワーキンググループが最も苦慮した点であった。ワーキンググループの結成時期が遅かったために年会執行部との交渉が遅れ、結果的にポスター発表の時間の一部に重なり、終了が 19 時 30 分になるなど、この点に関しては主催者および参加者共に問題が寄せられたことは大変残念であり、反省すべき点である。しかしこれは初年度特有の事情であることから、次回からはかなり早い段階から年会側と折衝できることが期待されるので、何とか時間枠の改善を目指したい。

7）このような取り組みを続けるべきかどうかという問いについては、「是非続けるべき」80％、「続けるべきだが方法を変えた方が良い」11％、と「続けるべきである」とする意見が 90％を超えたことは、学会員のほとんどがこのような取り組みを支持していることの証左であり、これを根拠に学会・年会執行部に対してより一層の支援をお願いしていくつもりである。

Ⅳ．科学的不正防止に関する今後の若手教育のあり方について

科学的不正を防止する方法の一つとして、若手教育の改革が必要であることは論を俟たないが、一方でその有効性に関しては疑問の声があることも事実である。曰く、「そんなことをいくらやっても捏造はゼロにはならない」と。今回のシンポジウムの意見としても、全くルールを守る気がない、いわゆる確信犯は矯正不可能であるという声が多く聞かれた。しかし若いときのインプリンティングが生涯の科学者のモラルを維持する上で大変重要であるのも事実であり、それは今回のシンポジウムの締めくくりとして共同座長の山中伸弥教授が述べられた次の一文がそれを見事に表している。

『研究って、ゴルフにすごく似てると思うんですね。ゴルフは自分でスコアをつけますから、誤魔化そうと思ったら誤魔化せるのですけれども、ゴルフを始めた時に、「スコアじゃないんだ、立派にやるのが目的なんだ」ということを、ほんとに熱く語ってくれる先輩に出会うと簡単にそう思えるんですね。でも不幸にも、「そんなん、ゴルフなんてスコアがなんぼや」いう人と出会っちゃうと、もうそうなってしまう』。周りの雰囲気がいかに重要か、そしてそういう雰囲気を醸成する上で、啓発活動と具体的なルール作りが欠かせないとわれわれワーキンググループは感じており、今後もその方針に則って活動を続けていくつもりである。会員諸氏のご協力とご助言を切にお願いする次第である。

なお、本シンポジウム開催にあたり、全面的にご支援下さった長田重一理事長および花岡文雄前会長、貴重な時間と場所を提供していただいた山本雅年会長および井上純一郎年会プログラム幹事、いつもわれわれの活動に対して適切で親身なご助言を下さる柳田充弘研究倫理委員長および同委員の皆様に感謝申し上げます。また福田博氏をはじめとする学会事務局の方や清水章弘氏・峰崎愛氏をはじめとする BMB2007 事務局の方には言葉にならないほどの献身的で熱烈なご協力をいただきました。この場を借りて深く感謝申し上げます。

特定非営利活動法人日本分子生物学会　第 15 期第 2 回理事会記録

日　時：2007 年 12 月 10 日㈪ 15：00 ～ 19：00
場　所：パシフィコ横浜会議センター 5 階「511＋512」
出席者：長田重一（理事長 /2008 年会長兼）岡田清孝（副理事長）、宮園浩平（副理事長 / 会計幹事兼）、阿形清和、石川冬木、上村　匡（編集幹事兼）、大隅典子、大隅良典、加藤茂明（広報幹事兼）後藤由季子、小原雄治（2009 年会長兼）、榊佳之、田中啓二、中山敬一、花岡文雄、町田泰則、山中伸弥、山本　雅（2007 年会長兼）、山本正幸、大石道夫（監事）、鍋島陽一（監事）、永田恭介（庶務幹事）、山梨裕司（集会幹事）、米田悦啓（集会幹事）、柳田充弘（Genes to Cells 編集長 / 研究倫理委員長）、谷口維紹（2010 年会長）、畠山昌則（2008 春季シンポジウム世話人）
以上 27 名
欠席者：岡野栄之、勝木元也、郷　通子、篠崎一雄、竹市雅俊、田畑哲之、月田早智子、中西重忠、西田栄介、本庶　佑、水野　猛　　以上 11 名
事務局：福田　博（記録）、並木孝憲、陽　智絵
関係議題参加者：峰崎　愛（BMB2007 事務局より）
本理事会成立について：
永田庶務幹事より、理事 19 名、監事 2 名、幹事 3 名、議題関係者会員 3 名が出席し、委任状（理事）11 名を受理しており、本理事会は細則第 4 章第 7 条により成立する旨、報告された。
議事録署名人の選任について：
長田理事長より、議事録署名人として、宮園副理事長と上村理事が指名され、承認された。
議　事：議事に先立ち、長田理事長より内田久雄名誉会員の訃報（本年 7 月 2 日ご逝去）につき報告がなされ、黙祷を奉げた。

1.　報告事項

1）　長田理事長より、本年 6 月、所轄庁である東京都より特定非営利活動法人の認証決定を受け、設立登記を完了したことの報告がなされた。本学会は 2007 年 6 月 19 日をもって法人設立となった。
続いて、永田庶務幹事より会員現況につき以下の通りの報告が行われた。
【2007 年 12 月 3 日現在会員数】

名誉会員	1 名
正 会 員	10287 名（海外在住含む）
学生会員	5640 名（海外在住含む）
賛助会員	39 社（43 口）
合　　計	15967 名
	（前年 12 月総会・対比で＋ 484）

今年の第 30 回総会は、法人として初めての通常総会となるが、数回におよぶメール一斉配信（総会案内・委任状提出の依頼）の結果、会員各位の協力により、正会員 10287 の過半数を超える 5217 通の委任状が集まり、総会成立（定款 26 条）となる見通しである。

2）　石川賞推薦委員長より 2007 年度に推薦した各種学術賞について報告がなされた。引き続き、花岡研究助成選考委員長より 2007 年度研究助成推薦状況と結果等について報告が行われた。

3）　石川賞推薦委員長より、本年度第 5 回日本分子生物学会三菱化学奨励賞候補として 12 件の応募があり、選考の結果、以下の受賞者 2 名が決定されたとの報告がなされた。
○福田 光則（東北大学大学院生命科学研究科）
低分子量 G タンパク質 Rab27A による膜輸送制御の分子基盤の解明
Studies on the role of small GTPase Rab27A in membrane traffic
○吉田清嗣（東京医科歯科大学難治疾患研究所）
DNA 傷害における細胞内シグナル伝達機構とアポトーシス誘導メカニズム
Molecular mechanisms for regulation of DNA damage-induced apoptotic cell death
授賞式および受賞講演は、BMB2007 開催 2 日目、2007 年 12 月 12 日㈬ 17：05 より行われる。

4）　畠山世話人より、第 8 回（2008 年）春季シンポジウムの開催概要の報告がなされた。
タイトル「躍動する分子生物学－北の大地から」
会　期：2008 年 5 月 26 日㈪～ 27 日㈫
開催地：札幌市
春季シンポジウム開催に際して、2001 年開催当初の基本路線を継承し、日本発の最近の優れた分子生物学研究を幅広く集め、ホットでエキサイティングな講演会を企画したいとの説明がなされた。シンポジウム前日の 5 月 25 日㈰には、分子生物学の楽しさ、素晴らしさを一般の方々に知ってもらう市民公開セミナーを開催する予定である。

5）　山本（雅）第 30 回年会長より、配布資料に基づき準備状況の報告がなされた。一般演題投稿数は 5581 題、事前参加登録は 7347 名となり、順調に準備が進んでいる（最終的に約 12000 名の参加者となった）。今回、演題投稿画面および事前参加登録画面に、入力者の所属学会に関する項目を設定し、その集計結果資料が配布された。概要は以下の通り

である。

・資料 1. BMB2007 一般演題　発表希望分類別演題数と発表者の所属学会分布

分子生物学会会員	3413 演題
生化学会会員	1695 演題
両学会会員	473 演題
総演題数	5581 演題

・資料 2. 事前参加登録者の所属学会分布

分子生物学会会員	3743 名	（うち学生会員 1761）
生化学会会員	2048 名	（うち学生会員 947）
両学会会員	993 名	（うち学生会員 58）
非会員	563 名	
合計	7347 名	

6）　長田第 31 回年会長より、開催企画案につき以下の通り報告がなされた。

正式名称：第 31 回日本分子生物学会年会・
　　第 81 回日本生化学会大会 合同大会

略称：BMB2008
　　（Biochemistry and Molecular Biology 2008）

会期：2008 年 12 月 9 日㈫～ 12 日㈮の 4 日間

会場：神戸ポートアイランド

組織委員：年会長（会頭）　長田　重一（分生）
　　大隅　良典（生化）
　　プログラム幹事　松田　道行（分生）
　　貝淵　弘三（生化）
　　庶務幹事　米田　悦啓（分生）
　　遠藤斗志也（生化）

合同開催ではあるが会期は 4 日間とし、プログラム案として、プレナリーレクチャー、シンポジウム、一般演題、バイオテクノロジーセミナーを予定している。前半は分子生物学会により近い内容のプログラムを、後半は生化学会により近い内容のプログラムを割り振っていく方向であるとの報告がなされた。

会計については BMB2007 にならい、合同大会会計として 1 本化したものを一定比率にて生化学会と案分し､分子生物学会として不利益とならないよう、公認会計士とも相談し準備に当たりたい旨説明がなされた。

7）　小原第 32 回年会長より、第 32 回（2009 年）年会の開催準備状況の報告が行われた。

会期：2009 年 12 月 9 日㈬～ 12 日㈯の 4 日間

会場：パシフィコ横浜

プログラム幹事、年会庶務幹事、組織委員の正式人選については、遺伝研を中心に検討中である。第 32 回年会では副年会長を設置し、荒木弘之会員にお願いする予定である。会場の特性を活用し、分子生物学会の精神を最大限発揮できるような企画を予定している旨報告がなされた。

8）　上村編集幹事より Genes to Cells の刊行状況、冊子版の会員購読実績について報告が行われた。

さらに配布資料に基づき、Genes to Cells の編集・発行にかかる学会の収支について、詳細説明がなされた。2006 年から 2008 年（見込み）までの、収入（Royalty）ならびに支出（Member Access 費用、Open Access 費用、Editorial Expenses 費用）の推移が報告され、編集・発行にかかる学会負担経費が大幅に改善される方向にあることが説明された。出版社との契約改定作業をさらに進める予定である。

引き続き、柳田編集長より投稿状況、編集状況について説明がなされた。表紙作成などについても、編集室においてさまざまな工夫を加えている。国際誌の中の Genes to Cells の位置づけ、また、2008 年からは出版社側の出版体制も Blackwell USA から Blackwell Asia（東京オフィス）へ移管されるので、出版業務全般が改善される方向にあるとの報告がなされた。

9）　大隅（典子）男女共同参画委員長より、資料に基づき、「第 2 回科学技術系専門職の男女共同参画実態調査」（2007.8.21 ～ 11.20 アンケート実施）の報告がなされた。最終回答数は 14121 件（前回は約 2 万件）、回答男女比は、男 73.3％女 26.7％であった。分子生物学会所属の回答数は 2772 件（前回は約 2800 件）であった。これは、全回答件数の 10.1％であり、男女共同参画学協会連絡会の加盟学会の中で、もっとも高い回答数である。現在、アンケート結果は解析中であるが、結果はまとまり次第、ホームページ等を通じて公表したいとの報告がなされた。

また BMB2007 会期中の 12 月 12 日、合同大会 BMB2007 男女共同参画ＷＧを世話人として、ランチョンワークショップ「アカデミアにおいて研究者人生を楽しむ」が開催される予定であるので、役員諸氏においてもぜひ参加頂きたい。

10）柳田研究倫理委員長より、論文調査ワーキンググループ（ＷＧ委員長：釣本敏樹九大教授）の調査状況報告が行われた。本ＷＧは、杉野元阪大教授が関与した論文捏造問題に対し、中立的立場でその背景を調査し、分子生物学会としての同捏造問題に対する説明責任を果たすと共に、将来を担う研究者の研究発表における教訓を明示することを目的として活動を行っている。本年 4 月から 10 月までに 4 回の会合を開催した（年会最終日 12 月 15 日に第 5 回ＷＧ会合を開催）。現在、調査対象を具体的に設定し、ＷＧ各委員にて調査分担を決めて作業を進めてい

る。今後の方針であるが、Genes to Cells に Letter to Editor（日本語版と英語版を作成予定）といった形で調査報告がなされることを想定して、作業が進められている。

11）中山若手教育問題ワーキンググループ座長より、本年 5 月から 9 月にかけて、計 3 回の会合を開催し、若手科学者の教育という観点から、将来に向けた研究倫理観の醸成を目指す方策について議論を重ねてきたとの報告がなされた。特に留意したのは単なる題目ではなく、実効性のある具体的な方策を考案することであった。

引き続き、同ＷＧで策定した資料：日本分子生物学会　研究倫理委員会･若手教育ＷＧ答申（案）「科学的不正を防止するための若手教育への方策について」が配布され、中山ＷＧ座長より以下の通り、答申（案）について詳細説明がなされた。

【以下は答申（案）の内容項目】

○若手教育における現状と問題点

⑴　生物学研究の持つ体質の問題

⑵　統一的な教育やルール作りおよび啓発活動の欠如

⑶　PI 教育の欠如と責任体制の不統一

⑷　自浄作用をもつ組織的な調査体制の未整備

⑸　体質改善に対する責任の不明確性

○若手教育における方策（総論）

⑴　目的

⑵　教育対象

⑶　教育手段

○具体的な活動案について

⑴　短期的（1 年以内）な具体的方策について

◎「細胞工学」誌上座談会「メイキング･オブ･分生若手教育シンポジウム」

◎　年会・分生若手教育シンポジウム『今こそ示そう科学者の良心－分生若手教育シンポジウム』

◎「細胞工学」誌学会探訪記事「分生若手教育シンポジウムに参加して」

⑵　長期的な具体的方策について

◎　長期的に責任を持つ体制の構築

◎　定期的なシンポジウムの開催

◎　研究倫理ガイドラインの作成と WEB 上での公開

◎　WEB 掲示板による公開記名ディスカッション

◎　事例研究の必要性

◎　大小メディアによる報道の利用

中山ＷＧ座長の説明に続き、柳田研究倫理委員長、加藤ＷＧ委員、山中ＷＧ委員からも、同ＷＧにおいてどのような検討作業･経緯を経て、今回の答申（案）提出となったかの補足説明がなされた。

引き続き、同答申（案）につき活発な討議が行われた。大筋では合意出来るが、社会一般を対象にしたアピールは誤解を招かないようもう少し慎重でありたい. WEB 利用による情報公開とディスカッションにはＨＰ運用上（不適切な書き込みへのリスク管理）の工夫が必要. 等々の意見が出された。ＨＰ担当の永田庶務幹事からは、ＨＰ運用状況と現状でも会員・非会員を問わず種々の問合せが相当数あることが報告された。

また出席者より、所属大学における倫理問題への対応状況や、日本学術会議における同問題への取り組み状況についても報告がなされた。

検討の結果、答申（案）の基本路線は認められたものの、表現方法などについて、同ワーキンググループにて再検討してもらうこととなった。また、同答申（案）について追加意見のある理事は、中山ＷＧ座長に個別に連絡することとなった。

今後の手順であるが、中山ＷＧ座長に理事の意見を集約してもらい、同ＷＧにて再検討を行い、研究倫理委員会の確認作業を経て、再度、理事会で検討することとなった。

12）加藤広報幹事より、本年 9 月に学会シンボルマーク（ロゴデザイン）が決定したことが報告された。公募に対し、総計 111 におよぶ作品の応募があり、学会執行部（選考委員:長田理事長、岡田副理事長、宮園副理事長、永田庶務幹事、加藤広報幹事）による 3 ラウンドの審査作業が行われた。その結果、出村浩之氏（1960 年北海道生まれ。グラフィックデザイナー）のデザイン採用を決定した。すでに会報（表紙）や学会ＨＰに掲載済みである。採用された出村氏には、賞金 10 万円と表彰状が贈呈された旨報告がなされた。

13）永田庶務幹事より、本年 11 月、前役員会からの懸案事項であった学会ホームページのリニューアル作業が終了したことが報告された。今回のリニューアルでは、見やすく、必要な情報を探しやすいページ作りを心がけた。英語ページについても、年明けにはリニューアル版を公開出来る予定である。

なおホームページ運用に関連して、上村理事より、今後、ＨＰへのバナー広告（有料）等をも含め、事業委員会（例：学会財政基盤の構築をも考慮した、法人としての事業全般の企画・検討）のようなものを立ち上げたらどうかとの意見が提出され、継続審議事項となった。

14）長田理事長より、第 30 回通常総会資料についての説明がなされ、総会当日の議事進行ならびに報告

担当者の確認がなされた。

2. 審議事項

1) 2006年度（平成18年度）収支決算承認の件

宮園会計幹事より2006年度決算の収支内容につき詳細報告が行われた。もともと2006年度予算は、2005年12月の第28回総会（福岡）で承認、成立した予算であるが、その後2006年6月の臨時評議員会にて、予算書の数字はそのままに収支科目等を法人会計対応用に編成し直した経緯がある。従前の任意団体会計から法人会計に切り替わり、同時に事務局が業務委託形式から法人独立事務所に切り替わったので、本決算では、当初の予算科目にない支出が生じている旨の説明がなされた。

2006年度決算の概要であるが、最終的に前年度繰越金4879万円に対し次年度繰越金6249万円といった繰越金増となった。従来の会員名簿を取りやめ（個人情報保護法に対応）、選挙権者名簿（氏名・所属機関名称のみを掲載）に切り替えることにより、経費（印刷代）を抑え、その節約分は新会員システム開発費用に充当した。同年度は法人への移行準備期であったため、当初は赤字を予想していたが、20th IUBMBならびに2006フォーラムより繰入金収入があり、結果としては赤字決算にならないで済んだことが報告された。

本決算については、2007年5月28日、公認会計士 宮城秀敏氏の会計監査を受けた。その後、7月12日に荒木弘之第14期会計監査の監査を受け、7月19日に近藤寿人第14期会計監査の監査を終了したことが報告された。

審議の結果、本決算は理事会で承認され、第30回通常総会に諮られることとなった。

2) 2007年度（平成19年度/年度途中で法人移行）収支決算承認の件

宮園会計幹事より、2007年度の会計取り扱い要領につき説明がなされた。2007年度は、もともと法人移行にともない（2007年6月19日、法人認証）、本年4月から9月末日までの変則会期になっている。法人の場合、会計年度終了後3カ月以内に所轄庁に決算報告、監査報告、事業報告書類を提出しなければならず、12月上旬に総会（年会）を開催している本学会は、学会運営上の理由により、本年度から9月末会期へ移行している。以上を基本原則として、さらに説明が行われた。

2007年度会計が複雑なのは、この4月～9月の途中、6月19日付にて法人成立となったためである。これに対応する経理処理として、学会顧問の宮城公認会計士の指導のもと、6月19日で区切るのではなく、4月～6月末日にて任意団体の決算処理を行い、その6月末日現在の資産一式を新法人が継承し、法人/分子生物学会としては、7月～9月末日にて決算処理を行うこととなった。

したがって2007年度は、実質3カ月/3カ月でそれぞれ収支決算書を作成、さらにそれらを合算した「4月から9月までの合算収支決算報告書」を作成し、そのすべての会計資料につき、10月26日、公認会計士 宮城秀敏氏の会計監査を受けたことが報告された。その後、11月14日に大石道夫監事、11月28日に鍋島陽一監事の監査を受けた。

2007年度決算の収支概要であるが、6カ月を一年度としたために、2297万円の繰越金増となっているが、これは今後予想される租税公課全般に対処するための結果であるとの説明がなされた（次年度2008年度からは、完全に年会会計も合算されるようになる）。収支各科目の説明がなされた後、大石、鍋島両監事より、金融機関の残高証明書等を一式確認し、19年度決算を認めた旨報告がなされた。

審議の結果、本決算は理事会で承認され、第30回通常総会に諮られることとなった。

なお大石監事より、学会の財政基盤も確立されつつあるので、繰越収支差額（うちの剰余金）の有効利用として、分子生物学の重要性をアピールする事業（啓発事業等）等に支出していくことを検討してほしいとの付帯意見が提出された。

3) 2008年度（平成20年度）予算確認ならびに事業計画承認の件

本年2月に行った法人申請との兼ね合いもあり、昨年の総会時に、2007年度と2008年度の2年分の予算を成立させている。したがって、本年は2008年度予算の確認手続きのみを行いたい旨、宮園会計監事より説明があった。

同予算の収支各科目の確認がなされ、引き続き、2008年度事業計画につき詳細説明が行われた。

審議の結果、同事業計画は理事会で承認され、第30回通常総会に諮られることとなった。

4) 会員種別変更（学生→正会員）に伴う年度会費の差額請求、に関する取り扱いについて

会計年度が［4月～3月→10月～9月］に変更になったことに伴い、今後、年度途中に会員種別変更（学生→正会員）となった会員からの問い合わせの増加が予想される旨、宮園会計幹事より報告された。通常、4月1日から就業/就職となるケースが多く、その対応（会費の差額請求のルール）を執行部（理事長、会計幹事、庶務幹事）にて検討した結果、以下を「事務局内/申し送り」としたい旨提案され、本理事会にて承認された。

【会員種別変更（学生→正会員）に伴う年度会費の

差額請求】に関する申し送り

・当年度の学生会費を完納しており、かつ該当年の12月1日現在、学生であることが証明できる場合は(学生証コピーをFAXにて提出してもらう)、差額請求はしないこととする。(当年度は完納扱いとする)

・正会員から学生会員に戻る場合も(ケースは少ない)、該当年の12月1日現在、学生であることが証明できる場合のみ(学生証コピー)、当年度より学生会員会費の金額で対応することとする。

5) 法人細則改正(副理事長選任に関する条文の整備、追加)の件

前回の役員会(2007年4月3日、第14期第15期合同評議員会)にて指摘のあった標記の件につき、長田理事長より説明がなされ、資料(細則改正案)が配布された。

審議の結果、資料(案)通り、副理事長の選任に関する条文を、細則の第4条として追加し、従前の第4条以下は第5条以下として、順次おくることとなった。

本日付をもって、以下の通り、特定非営利活動法人日本分子生物学会細則 を一部改正とした。

細則

第3条

理事長は、次の各号に掲げる方法により選任する。

1) 理事長は新理事を招集し、新理事の互選により新理事長を選出する。

2) 投票は1人1票、無記名による単記とし、投票総数の過半数を得た者を新理事長とする。ただし、投票総数の過半数を得た者がないときは、得票者中の上位の者より順に2名を選出し、改めて投票を行い、得票総数の上位の者を新理事長として選任する。このとき、同位の場合には抽選により決定する。

3) 理事長は理事を兼ねるものとする。

第4条

新理事長が副理事長の設置を希望した場合、次の各号に掲げる方法により、新副理事長2人以内を選任することができる。

1) 新理事長は新理事を招集し、新理事の互選により新副理事長を選出する。ただし、新理事長は投票を行うより前に、選任する新副理事長の定数を明確にするものとする。

2) 投票は1人1票、無記名による単記とし、得票者中の上位の者を新副理事長として選任する。このとき、同位の場合には抽選により決定する。

3) 副理事長は理事を兼ねるものとする。

6) 賞推薦委員会 / 運用指針(重複申請に関する取扱い / 委員会内規)について

石川賞推薦委員長より、各種学術賞の学会推薦(審査)に際し、従来は特に定まった委員会規定がなかったので、今期の委員会で運用している指針を、日本分子生物学会賞推薦委員会の正式な内規として定めたらどうかとの提案があり、配布資料の通りに制定された。

「各種学術賞の学会推薦(審査)手続きに関する賞推薦委員会内規」

(2007年12月10日 第15期第2回理事会にて制定)

【推薦審査の手順】

1. 学会への推薦依頼の応募締め切り(財団等の締め切りの1ヶ月前)後、ただちに委員長は委員に応募書類の写しを郵送し審査依頼を行う。応募書類の写し等は審査委員の責任で審査後廃棄する。
2. 委員は、応募書類を審査し、推薦可能な候補者と推薦すべきでない 候補者を決定する。推薦可能な候補者については順位をつける。いずれも簡単な理由とともに委員長に期日(おおむね財団等の締め切りの10日前)までにメールで報告する。
3. 委員長は審査結果に基づき、推薦可能件数内で委員の評価が高い者を上位から推薦する。この際、一人の委員からでも推薦すべきでないと 評価された候補者は原則として推薦しない。また、その年度内において、すでに他の賞等に推薦することが決定している候補者は除外する。財団推薦締め切りが同時期である等の理由によりいずれの重複推薦依頼 を採用するかの判断が困難な場合には、委員長が個別に判断する。

【重複申請についての取り扱い】

1. 外部財団等の各種賞等の推薦は、原則として一人につき年度あたり1件とする。
2. 重複申請があった場合には、すでにある賞等の推薦が決定されている候補者は、それ以降審査する他の賞等の推薦候補者として原則的に考慮しない。
3. 推薦候補者より重複推薦依頼の希望順位があった場合には、それを考慮する。

付記. 日本分子生物学会三菱化学奨励賞は本学会の賞であるため、上記に当てはまらない。

7) 2009年春季シンポジウムについて

世話人を宮崎大学フロンティア科学実験センター中山建男教授に依頼することが諮られ、承認された。(後日、中山世話人より連絡があり、会期は2009年5月11日(月)～12日(火)(前日の5月10日に市民公開講座を開催)、会場はワールドコンベンションセンターサミットを使用予定)

8)　第 33 回（2010 年）年会について

第 33 回年会については、年会長を東京大学大学院医学系研究科 谷口維紹氏に依頼することが諮られ、承認された。

開催地であるが、横浜では 2010 年の会場調整が出来ず、すでに本年 9 月の時点で、学会事務局にて、神戸ポートアイランドを押さえている旨、理事長より説明がなされた（年会開催地としては概ね東・西が交互になることが望ましい．との、2006.6.20 開催の臨時評議員会申し送りがあり、結果的に、その申し送りに準じたこととなった）。

引き続き、谷口会員より所信表明がなされ、さらに、以下の意見が提出された。

・学術年会企画と、学会がかかえている種々の課題は別次元で考えるべきものであり、第 33 回年会長として学術的な企画に専念させてほしい。
・第一に、若い研究者のためのより良い年会とするべき、最善の努力をはらいたい。
・会場側（神戸ポートアイランド）から要請があり、その開催形式（規模）に合わせ、使用施設（仮予約から本予約へ切り替え）を 12 月中に確定しなければならない。
・日本生化学会（2010 年会頭 田中啓二氏）より合同開催希望の申し入れを受けている。

その後、自由討論に入り、活発な意見交換がなされた。提出された意見は以下のようなものである。

・参加者の経済的負担、時間的負担を考えると合同開催が良い。
・組織（生化学会側の事情／生化学会側が実施した将来計画アンケート等々）の問題と年会運営は別に考えるべきものである。
・研究成果の相互作用を考えても合同開催が良い。
・分子生物学は学際的な学問として発展してきたので、さまざまな関連分野とジョイントすることには賛成であるが、そのパートナー学会は多数あるのが望ましい。
・年会がここまでマンモス化した現在、さらに開催規模が大きくなるような合同開催にはデメリットしか見当たらない。
・分野別演題数・所属学会分布／事前参加登録者の所属学会分布（報告事項 5. の資料 1.2.）を見る限り、あまりメリットは読み取れない。
・世界的にも分子生物学会と生化学会は合同で行われているので合同開催に賛成。
・分子生物学会と生化学会では、その成り立ち、会員の体質が大きく異なるので単独開催が良い。
・自分の周辺は合同開催に賛成している。
・自分の周辺（特に若手研究者）には合同開催反対の者が多い。
・両学会のアイデンティティを尊重し、そのアクティビティの決定にはもっと慎重であるべきだ。
・開催方針を決める前に会員から広く意見を求めるべきで、早急な合同開催決定には反対である。
・学会出張の観点からも会期 5 日間は長すぎる。合同開催で会期 4 日であれば、賛成出来る。

以上 1 時間半をかけて本議題を活発に討論した。理事会出席者ほぼ全員が意見を述べ、最終的にその取り扱いは、従来の慣習を尊重し、谷口第 33 回年会長の判断に委ねられることとなった。結果、谷口年会長より、2010 年の年会は日本生化学会との合同開催にしたいとの発言があり、決定した。（後日、谷口年会長より、開催会期を次のように決定したとの連絡を得ている。第 33 回年会／会期：2010 年 12 月 7 日㈫～ 10 日㈮　開催地：神戸）

上記、第 15 期第 2 回理事会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

2007 年 12 月 10 日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

第 15 期第 2 回理事会

議　　長　　長 田 重 一　　㊞

議事録署名人　　宮 園 浩 平　　㊞

議事録署名人　　上 村　　匡　　㊞

特定非営利活動法人日本分子生物学会　平成 20 年度（第 30 回）通常総会記録

日　　時：平成 19 年 12 月 12 日㈬ 16：15 ～ 17：00
場　　所：パシフィコ横浜　アネックスホール 2 階
　　F201（第 18 会場）
社員数（正会員＋名誉会員）：10287 名
出席者数：5269 名（本人出席 52 名、表決委任者 5217 名）

議事内容：

1. 長田理事長より開会の挨拶がなされた。議事に先立ち、渡邊 格名誉会員（本年 3 月 23 日ご逝去）、内田久雄名誉会員（本年 7 月 2 日ご逝去）の訃報の報告がなされ、黙祷を奉げた。
2. 定款第 25 条に基づき、長田理事長より本総会議長として山梨裕司会員が指名された。さらに定款第 29 条に基づき、議事録署名人として、宮園副理事長、上村理事が選任された。
3. 山梨議長より、定款第 26 条（総会の定足数）に基づき、上記表決委任者（委任状）を含めて出席 5269 名となり、本総会は成立する旨報告された。
4. 経過報告（事業報告）

1） 理事長報告

長田理事長より、第 15 期執行部の組織概要（理事、監事、幹事、各委員会）の説明があり、引き続き、18 年度ならびに 19 年度（年度途中で法人へ移行）の事業報告（分子生物学･学術研究事業、普及・啓発事業、その他の事業）がなされた。

平成 19 年 6 月 19 日、所轄庁である東京都より特定非営利活動法人の認証決定を受け、設立登記を完了した旨報告された。本学会は、本年 6 月 19 日をもって法人設立となった。

第 15 期においては、前役員会から継続して研究倫理委員会を設置しており、研究倫理、論文不正調査の問題（論文調査ワーキンググループ、若手教育問題ワーキンググループ）に取り組んでいることが報告された。

また、一昨日開催の理事会において、第 33 回（2010 年）年会については、東京大学大学院医学系研究科　谷口維紹氏に年会長をお願いすることが決定した。

2） 編集（Genes to Cells）報告

上村編集幹事より Genes to Cells の刊行状況ならびに 2008 年以降の出版体制につき報告がなされた。2008 年からは Blackwell USA から Blackwell Asia（東京オフィス）へ移管されるので、出版業務全般が改善される方向にある。さらに、Genes to Cells の編集・発行にかかる学会の収支についての説明がなされた。学会負担経費は改善される方向にあり、出版社との契約改定作業を進める予定である旨報告された。

3） 庶務報告

永田庶務幹事より会員現況について報告がなされた。〔2007 年 12 月 3 日現在、名誉会員 1 名、正会員 10287 名、学生会員 5640 名、賛助会員 39 団体、総計 15967 で、前年・総会時に比べ 484 名の増〕

本年 11 月、前役員会からの懸案事項であった学会ホームページのリニューアル作業が終了したことが報告された。今回のリニューアルでは、見やすく、必要な情報を探しやすいページ作りを心がけた。英語ページについても、年明けにはリニューアル版を公開出来る予定である。

また、本年 9 月に学会シンボルマーク（ロゴデザイン）が決定したことが報告された。公募に対し、総計 111 におよぶ作品の応募があり、学会執行部（選考委員：長田理事長、岡田副理事長、宮園副理事長、永田庶務幹事、加藤広報幹事）による 3 ラウンドの審査作業が行われた。その結果、出村浩之氏のデザイン採用を決定した。すでに会報 88 号（表紙）や学会ＨＰに掲載済みである。採用された出村氏には、賞金 10 万円と表彰状を贈呈した。

4） 研究倫理委委員会・若手教育ワーキンググループ報告

中山若手教育問題ワーキンググループ座長より、同ワーキンググループの活動状況につき報告が行われた。同 WG では、若手科学者の教育という観点から、将来に向けた研究倫理観の醸成を目指す方策について議論を重ねている。

一昨日の理事会に、日本分子生物学会研究倫理委員会・若手教育ＷＧ答申（案）「科学的不正を防止するための若手教育への方策について」を提出し、活発な討論が行われた。答申の策定、公開に向け、引き続き、検討作業を進める予定であることが報告された。

【以下は答申（案）の内容項目】

○若手教育における現状と問題点
○若手教育における方策（総論）
○具体的な活動案について
⑴短期的（1 年以内）な具体的方策について
⑵長期的な具体的方策について

BMB2007 会期中である明日 13 日の夕方、

第 15 会場にて、日本分子生物学会　若手教育シンポジウム『今こそ示そう科学者の良心－みんなで考える科学的不正問題－』を開催するので、ふるって参加してほしい。

5）2008 年春季シンポジウムについて

畠山世話人より、標記シンポジウム「躍動する分子生物学－北の大地から」を 2008 年 5 月 26 日㈪～ 27 日㈫、札幌市内にて開催予定であることが報告された。前日の 25 日㈰には市民公開セミナーを開催する予定である。

4.　議　事

1）平成 18 年度（2006 年度）収支決算承認の件

宮園会計幹事より 18 年度決算の収支内容につき詳細報告が行われた。本決算については、本年 5 月 28 日、公認会計士 宮城秀敏氏の会計監査を受けた。その後、7 月 12 日に荒木弘之第 14 期会計監査の監査を受け、7 月 19 日に近藤寿人第 14 期会計監査の監査を終了したことが報告された。

審議の結果、本決算は異議なく承認された。

2）平成 19 年度（2007 年度）（年度途中で法人へ継承）収支決算承認の件

宮園会計幹事より、19 年度の会計取り扱い要領につき説明がなされた。19 年度は、もともと法人移行にともない（19 年 6 月 19 日､法人認証）、本年 4 月から 9 月末日までの変則会期になっている。法人の場合、会計年度終了後 3 カ月以内に所轄庁に決算報告、監査報告、事業報告書類を提出しなければならず、12 月上旬に総会（年会）を開催している本学会は､学会運営上の理由により、本年度から 9 月末会期へ移行している。以上を基本原則として、さらに説明が行われた。

19 年度会計が複雑なのは、この 4 月～ 9 月の途中、6 月 19 日付にて法人成立となったためである。これに対応する経理処理として、学会顧問の宮城公認会計士の指導のもと、6 月 19 日で区切るのではなく、4 月～ 6 月末日にて任意団体の決算処理を行い、その 6 月末日現在の資産一式を新法人が継承し、法人 / 分子生物学会としては、7 月～ 9 月末日にて決算処理を行うこととなった。

したがって 19 年度は、実質 3 カ月 /3 カ月でそれぞれ収支決算書を作成、さらにそれらを合算した「4 月から 9 月までの合算収支決算報告書」を作成し、そのすべての会計資料につき、本年 10 月 26 日、公認会計士 宮城秀敏氏の会計監査を受けたことが報告された。その後、11 月 14 日に大石道夫監事、11 月 28 日に鍋島陽一監事の監査を受けた。

審議の結果、本決算は異議なく承認された。

3）平成 20 年度（2008 年度）収支予算確認ならびに事業計画承認の件

本年 2 月に行った法人申請との兼ね合いもあり、昨年の第 29 回総会時に、19 年度と 20 年度の 2 年分の予算を成立させている。したがって、本年は 20 年度予算の確認手続きのみを行いたい旨、宮園会計監事より説明があった。

同予算の収支各科目の確認がなされ､引き続き、20 年度事業計画につき詳細説明が行われた。

審議の結果､同事業計画は異議なく承認された。

4）その他

◎会員種別変更（学生→正会員）に伴う年度会費の差額請求、に関する取り扱いについて

会計年度が [4 月～ 3 月→ 10 月～ 9 月] に変更になったことに伴い、年度途中に会員種別変更（学生→正会員）となった場合の、年度会費の差額請求に関する取り扱いを明確に決めておく必要が出てきた。本件について、本年 12 月 10 日開催の理事会において検討した結果、以下のように決定したことが報告された。

【会員種別変更（学生→正会員）に伴う年度会費の差額請求】に関する申し送り

・当年度の学生会費を完納しており、かつ該当年の 12 月 1 日現在、学生であることが証明できる場合は（学生証コピーを FAX にて提出してもらう）、差額請求はしないこととする。（当年度は完納扱いとする）

・正会員から学生会員に戻る場合も（ケースは少ない）、該当年の 12 月 1 日現在、学生であることが証明できる場合のみ（学生証コピー）、当年度より学生会員会費の金額で対応することとする。

5.　第 30 回（2007 年）山本 雅年会長の挨拶があり、年会は順調に運営されているとの説明がなされた。演題数、本日現在の参加者数等につき報告された。

6.　第 31 回（2008 年）長田年会長より、第 31 回年会は生化学会との合同大会で、2008 年 12 月 9 日㈫～ 12 日㈮の日程で、神戸ポートアイランドにて開催予定であることが報告された。合同開催ではあるが会期は 4 日間とし、プログラム案として、プレナリーレクチャー、シンポジウム、一般演題、バイオテクノロジーセミナーを予定しているとの説明がなされた。

7.　第 32 回（2009 年）小原年会長より､第 32 回年会は、2009 年 12 月 9 日㈬～ 12 日㈯の 4 日間、パシフィコ横浜で開催予定であることが報告された。

プログラム幹事、年会庶務幹事、組織委員の正式

人選については、遺伝研を中心に検討中である。第32回年会では副年会長を設置し、荒木弘之会員にお願いする予定である。会場の特性を活用し、分子生物学会の精神を最大限発揮できるような企画を予定している旨報告がなされた。

8. 議長より閉会の挨拶があり、第30回総会が終了した。

上記、平成20年度通常総会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

平成19年12月12日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会　平成20年度通常総会

議　　長　長田重一　㊞
議事録署名人　宮園浩平　㊞
議事録署名人　上村　匡　㊞

平成 18 年度（2006 年度）収支決算報告

平成 18 年度（2006 年度）収支決算報告書

平成 18 年 4 月 1 日から平成 19 年 3 月 31 日まで

日本分子生物学会

科　　目	予算額	決算額	備　　考
Ⅰ　収入の部			
1　入会金収入	300,000	521,000	
正 会 員	150,000	222,000	
学生会員	150,000	299,000	
2　会費収入	56,380,000	46,417,050	
正 会 員	39,690,000	37,116,050	
学生会員	14,640,000	7,522,000	2006.8 月　発表資格を会員限定としなかったため、納入減
海外在住	700,000	519,000	
賛助会員	1,350,000	1,260,000	
3　事業収入	3,500,000	2,195,388	
①分子生物学・学術研究事業	0	0	
年会	—	—	
春季シンポジウム	—	—	
②普及啓発事業（ＨＰ・刊行物等）	3,500,000	2,195,388	
広告収入（会員名簿）	1,800,000	—	印刷版会員名簿取りやめ
国際誌編集協力金	1,700,000	2,195,388	ブラックウェル社より
③その他の事業	0	0	
その他の事業	0	0	
4　助成金・補助金収入	1,300,000	1,300,000	三菱化学より　　↓ 2006 フォーラムより 1398 万円
5　繰入金収入	—	25,686,036	20th IUBMB より 770 万円、将来事業準備金より 400 万円
6　雑収入・預金利息	60,000	44,524	複写使用料分配金、JST 抄録利用料等
当期収入合計（A）	61,540,000	76,163,998	
前期繰越収支差額	48,800,000	48,798,830	
収入合計（B）	110,340,000	124,962,828	
Ⅱ　支出の部			
1　事業費	39,950,000	25,385,886	
①分子生物学・学術研究事業	12,000,000	7,000,000	〈学術集会の開催等〉
年会	5,000,000	0	第 29 回年会（20th IUBMB）より返金
春季シンポジウム	7,000,000	7,000,000	2006 フォーラム
②普及啓発事業（ＨＰ・刊行物等）	25,650,000	15,827,388	
会報刊行費	3,300,000	2,552,918	84、85、86 号
国際誌発行支援金	10,000,000	9,360,000	編集室の人件費、謝金、編集業務費
国際誌オンライン費用	4,400,000	1,000,000	ブラックウェル社支払い（本年度はフリーアクセス料 100 万円のみ）
国際誌購読関係費	750,000	0	購読取りまとめは学会事務局の内部処理へ
会員名簿発行費	6,500,000	1,633,470	選挙費用（選挙権者名簿印刷、150 万円）
ホームページ関係費	700,000	1,281,000	メール配信作業含む
③その他の事業	2,300,000	2,558,498	
三菱化学奨励賞関係費	1,300,000	1,020,979	副賞、賞状作成　2 名分
事業費その他	1,000,000	1,537,519	男女共同参画学協会連絡会、10/6 シンポジウム運営含む
2　管理費	27,750,000	35,244,651	
事務所賃料	—	2,235,761	賃料・共益費、光熱費、仲介手数料（保証金は差入資産へ）
給与手当	—	8,389,785	事務局人件費（職員：9 月は 2 名、10 月より 3 名雇用）
法定福利費	—	592,978	社会保険料・雇用保険等事業者負担分
福利厚生費	—	0	
業務委託費	12,000,000	7,021,530	会計事務所顧問料、メデイ・イシュは 2006.10 月で委託中止
会員管理システム運用管理費	—	5,080,059	Web オンライン新会員システム開発費、独自ドメイン取得、SSL 証明書代
印刷費	350,000	1,052,461	請求書出力、封筒代等
通信運搬費	12,900,000	8,259,671	会員名簿分の重量減、会報は佐川メール経由の冊子小包へ切替
庶務事務費	500,000	500,000	
旅費交通費	1,100,000	1,293,430	
会議費	100,000	218,816	
消耗品費	0	169,703	
雑費	800,000	326,779	
減価償却	—	103,678	
3　租税公課	—	0	↓事務局開設費用＋行政書士法人申請関係 33 万円
4　予備費	2,000,000	1,839,420	（PC、通信設備・回線工事、什器備品）
当期支出合計（C）	69,700,000	62,469,957	
当期収支差額（A）−（C）	−8,160,000	13,694,041	
次期繰越収支差額（B）−（C）	40,640,000	62,492,871	

（単位：円）

平成 18 年度（2006 年度）貸借対照表

平成 19 年 3 月 31 日現在

日本分子生物学会

科　　目	金　　額		
Ⅰ　資産の部			
1　流動資産			
現金預金	84,839,701		
未収入金	167,000		
前払費用	7,210,007		
仮払金	1,300,000		
流動資産合計		93,516,708	
2　固定資産			
工具器具備品	999,872		
差入保証金	282,090		
固定資産合計		1,281,962	
資産合計			94,798,670
Ⅱ　負債の部			
1　流動負債			
未払金	163,971		
前受会費	31,927,200		
預り金	214,628		
流動負債合計		32,305,799	
負債合計			32,305,799
Ⅲ　正味財産の部			
前期繰越正味財産		48,798,830	
当期正味財産増加額		13,694,041	
正味財産合計			62,492,871
負債及び正味財産合計			94,798,670

（単位：円）

【監査報告】

平成 18 年度（2006 年度）決算に関しては、平成 19 年 5 月 26 日、独立監査人 宮城秀敏公認会計士の監査を受けました。その計算書類が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、平成 18 年度の収支及び正味財産増減の状況並びに同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める．との監査報告書の提出を受けました。その後、同年 7 月 12 日に荒木弘之第 14 期会計監査による監査を実施、同年 7 月 19 日、近藤寿人第 14 期会計監査による監査を終了し、経理処理が適正に行われていることが確認されました。ご報告いたします。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

平成 19 年度（2007 年度）収支決算報告

平成 19 年度（2007 年度）収支決算報告書

平成 19 年 4 月 1 日から平成 19 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人　日本分子生物学会

科　　目	予算額	決算額	備　　考
Ⅰ　収入の部			
1　入会金収入	500,000	1,188,000	
正　会　員	200,000	399,000	
学生会員	300,000	789,000	
2　会費収入	72,360,000	57,206,951	
正　会　員（海外在住含む）	56,280,000	48,196,451	
学生会員（海外在住含む）	14,400,000	7,490,500	
賛助会員	1,680,000	1,520,000	
3　事業収入	8,600,000	1,326,646	
①分子生物学・学術研究事業	6,600,000	1,326,646	
年会	—	—	
春季シンポジウム	6,600,000	1,326,646	
②普及啓発事業（ＨＰ・刊行物等）	2,000,000	0	
国際誌編集協力金	2,000,000	0	
③その他の事業	0	0	
その他の事業	0	0	
4　助成金・補助金収入	—	0	奨励賞副賞費は次年度会計へ
5　雑収入・預金利息	60,000	54,224	
当期収入合計（A）	81,520,000	59,775,821	
前期繰越収支差額	62,490,000	62,492,871	
収入合計（B）	144,010,000	122,268,692	
Ⅱ　支出の部			
1　事業費	25,700,000	13,867,346	
①分子生物学・学術研究事業	10,600,000	5,684,602	〈学術集会の開催等〉
年会	—	0	第 30 回年会は次年度会計へ
春季シンポジウム	10,600,000	5,684,602	第 7 回春季シンポジウム（淡路夢舞台国際会議場）
②普及啓発事業（ＨＰ・刊行物等）	13,100,000	7,288,483	
会報刊行費	1,500,000	1,335,125	会報 87 号（デザイン / リニューアル）
国際誌発行支援金	5,000,000	4,522,358	編集業務費、編集室人件費、謝金、編集室家賃、その他
国際誌オンライン費用	4,400,000	0	
ホームペ－ジ関係費	2,200,000	1,431,000	全面リニューアル費用含む
③その他の事業	2,000,000	894,261	
三菱化学奨励賞関係費	—	0	
事業費その他	2,000,000	894,261	若手教育問題 WG 関係費用、生科連会費、男女共同参画学協会
2　管理費	23,530,000	22,114,748	「女子高校生夏の学校」講師旅費
事務所賃料	1,300,000	1,001,944	賃料・共益費、光熱費、差入保証金修正含む
給与手当	9,000,000	9,396,288	事務局人件費
法定福利費	1,000,000	1,403,129	社会保険料・雇用保険等事業者負担分
福利厚生費	80,000	28,698	
業務委託費	700,000	822,150	公認会計士監査料、会計事務所顧問料、その他
会員管理システム運用管理費	1,200,000	2,436,000	Web 新システム開発費用の追加精算含む
印刷費	1,000,000	1,219,575	請求書出力、封筒代、全会員への ID・パスワード出力等
通信運搬費	6,000,000	3,263,169	
旅費交通費	1,500,000	1,228,000	新旧合同評議員会等
会議費	300,000	366,577	
支払手数料	150,000	99,387	
消耗品費	500,000	85,755	
雑費	800,000	590,839	庶務幹事事務費 30 万円を含む
減価償却費	—	173,237	
3　租税公課	—	37,300	
4　予備費	1,000,000	780,144	論文調査ＷＧ費用
当期支出合計（C）	50,230,000	36,799,538	
当期収支差額（A）-（C）	31,290,000	22,976,283	
次期繰越収支差額（B）-（C）	93,780,000	85,469,154	

（単位：円）

※　本決算は、任意団体期間である 4 月 1 日から 6 月 30 日までの収支に、法人移行後の 7 月 1 日から 9 月 30 日までの法人収支を合算したものである。

平成 19 年度（2007 年度）貸借対照表

平成 19 年 9 月 30 日現在

特定非営利活動法人　日本分子生物学会

科　　目	金　　額		
Ⅰ　資産の部			
1　流動資産			
現金預金	87,236,087		
立替金	35,000		
前払費用	276,882		
流動資産合計		87,547,969	
2　固定資産			
工具器具備品	826,635		
差入保証金	614,180		
固定資産合計		1,440,815	
資産合計			88,988,784
Ⅱ　負債の部			
1　流動負債			
未払金	2,029,027		
前受会費	167,500		
前受金	1,300,000		
預り金	23,103		
流動負債合計		3,519,630	
負債合計			3,519,630
Ⅲ　正味財産の部			
前期繰越正味財産		0	
当期正味財産増加額		85,469,154	
正味財産合計			85,469,154
負債及び正味財産合計			88,988,784

（単位：円）

平成 19 年度（2007 年度）財産目録

平成 19 年 9 月 30 日現在

特定非営利活動法人　日本分子生物学会

科　　目	金　　額		
Ⅰ　資産の部			
1　流動資産			
現金預金			
現金	239,903		
郵便振替　00170-5-592854	14,004,816		
郵便振替　00100-2-465016	153,500		
普通預金　三菱東京 UFJ 銀行　春日町支店	3,137,396		
普通預金　三菱東京 UFJ 銀行　所沢支店	1,645,025		
普通預金　三菱 UFJ 信託銀行　上野支店	155,240		
普通預金　三井住友銀行　飯田橋支店	14,324,901		
普通預金　中央三井信託銀行　本店営業部	6,548,097		
定期預金　三菱東京 UFJ 銀行　春日町支店	10,018,440		
定期預金　みずほ銀行　本郷支店	3,002,288		
定期預金　三井住友銀行　飯田橋支店	10,000,000		
定期預金　三菱 UFJ 信託銀行　上野支店	5,000,000		
定期預金　中央三井信託銀行　本店営業部	10,000,000		
定期預金　住友信託銀行　東京営業部	9,006,481		
立替金　　購読料（GENES TO CELLS）	35,000		
前払費用　事務所家賃 10 月分	195,000		
前払費用　編集室家賃 10 月分	60,000		
前払費用　編集室火災保険 H19.10－H21.7 月分	21,882		
流動資産合計		87,547,969	
2　固定資産			
工具器具備品　電話取付一式	563,864		
工具器具備品　複合機	262,771		
差入保証金　事務所	564,180		
差入保証金　編集室	50,000		
固定資産合計		1,440,815	
資産合計			88,988,784
Ⅱ　負債の部			
1　流動負債			
未払金　ホームページ更新費用 9 月分	105,000		
未払金　ホームページ全面リニューアル費用	780,000		
未払金　GTC 誌編集業務費 9 月分	350,000		
未払金　GTC 新編集室開設経費等	332,282		
未払金　会員サーバ運用保守 9 月分	178,500		
未払金　社会保険料	279,885		
未払金　通信運搬費 9 月分	3,360		
（外部倉庫、宅急便代）			
前受会費　平成 20 年度以降会費	167,500		
前受金　三菱化学奨励賞副賞費	1,300,000		
預り金　職員に対する雇用保険	23,103		
流動負債合計		3,519,630	
負債合計			3,519,630
Ⅲ　正味財産の部			
前期繰越正味財産		0	
当期正味財産増加額		85,469,154	
正味財産合計			85,469,154
負債及び正味財産合計			88,988,784

（単位：円）

平成 19 年度（2007 年度）個別注記表

平成 19 年 7 月 1 日から平成 19 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人　日本分子生物学会

1. 固定資産の減価償却の方法
   定率法によっております。

2. 固定資産の減価償却累計額
   129,212 円

3. 担保に供している資産はありません。

4. 保証債務はありません。

【監査報告】

平成 19 年度（2007 年度）決算に関して、平成 19 年 10 月 26 日、独立監査人 宮城秀敏公認会計士の監査を受けました。その計算書類が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、平成 19 年度の収支及び正味財産増減の状況並びに同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める．との監査報告書の提出を受けました。その後、同年 11 月 14 日に大石道夫第 15 期監事による監査を実施、同年 11 月 28 日、鍋島陽一第 15 期監事による監査を終了しました。（両監事による会計監査は、帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きにより行われた。）ここにご報告いたします。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

平成 20 年度（2008 年度）収支予算

平成 20 年度（2008 年度）収支予算

平成 19 年 10 月 1 日から平成 20 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人　日本分子生物学会

科　　目	20 年度予算	備　　考
Ⅰ　収入の部		
1　入会金収入	500,000	
正 会 員	200,000	1,000 円× 200 名
学生会員	300,000	1,000 円× 300 名
2　会費収入	72,360,000	
正会員（海外在住含む）	56,280,000	6,500 円× 9,500 名×約 90% ＋海外在住 700,000 円
学生会員（海外在住含む）	14,400,000	3,000 円× 6,000 名× 80%
賛助会員	1,680,000	40,000 円× 42 口
3　事業収入	234,800,000	
①分子生物学・学術研究事業	232,800,000	〈学術集会の開催等〉
年会	226,200,000	第 30 回年会（合同大会）案分繰入れ（377,000,000 円× 60%）
春季シンポジウム	6,600,000	市民公開講座含む
②普及啓発事業（ＨＰ・刊行物等）	2,000,000	
国際誌編集協力金	2,000,000	ブラックウエル社より
③その他の事業	0	
その他の事業	0	
4　助成金・補助金収入	1,300,000	三菱化学より、奨励賞副賞および選考経費として
5　雑収入	60,000	複写使用料分配金，JST 抄録利用料等
当期収入合計（A）	309,020,000	
前期繰越収支差額	85,470,000	※ 19 年度決算の繰越金概算とした。
収入合計（B）	394,490,000	
Ⅱ　支出の部		
1　事業費	261,000,000	
①分子生物学・学術研究事業	236,800,000	〈学術集会の開催等〉
年会	226,200,000	（500 万円補助金支出含む）
春季シンポジウム	10,600,000	
②普及啓発事業（ＨＰ・刊行物等）	20,400,000	
会報刊行費	4,000,000	
国際誌発行支援金	10,000,000	
国際誌オンライン費用	4,400,000	ブラックウェル社支払い（フリーアクセス量料 100 万円含む）
ホームページ関係費	2,000,000	10 万円× 12 カ月＋メール配信・予備 80 万円
③その他の事業	3,800,000	
三菱化学奨励賞関係費	1,300,000	
事業費その他	2,000,000	
役員選挙	500,000	電子投票 / 検討
2　管理費	44,100,000	
事務所賃料	2,600,000	賃料、管理費、光熱費等含む
給与手当	18,000,000	事務局人件費
法定福利費	2,000,000	社会保険料・雇用保険等事業者負担分
福利厚生費	100,000	雇用職員健康診断等
業務委託費	900,000	外部会計事務所監査含む
会員管理システム運用管理費	2,400,000	サーバー運用保守等
印刷費	1,500,000	会費請求書出力含む
通信運搬費	12,500,000	会報、会費請求、年会プログラム
消耗品費	800,000	封筒代含む
旅費交通費	2,000,000	理事会他
会議費	300,000	
支払手数料	200,000	
雑費	800,000	
減価償却費	—	
3　租税公課	2,000,000	
4　特定預金支出	1,000,000	法定退職給与引当金
5　予備費	2,000,000	
当期支出合計（C）	310,100,000	
当期収支差額（A）-（C）	-1,080,000	
次期繰越収支差額（B）-（C）	84,390,000	

（単位：円）

※　本予算は、法人申請との兼ね合いがあったために、第 29 回総会（2006 年 12 月 7 日）において、すでに承認されています。

学術賞、研究助成の本学会推薦について

本学会に推薦依頼あるいは案内のある学術賞、研究助成は、本号に一覧として掲載しております。そのうち、応募にあたり学会等の推薦が必要なものについての本学会からの推薦は、本学会研究助成選考委員会または賞推薦委員会の審査に従って行います。応募希望の方は、直接助成先に問合わせ、申請書類を各自お取寄せのうえ、ふるってご応募下さい。

本学会への推薦依頼の手続きは次の通りです。

1. 提出物
   1) 本申請に必要な書類（オリジナルおよび募集要項に記載されている部数のコピー）
   2) 本学会の選考委員用および学会用控に、上記申請書類のコピー計6部（論文は不要）
   3) 申込受付確認のための返信封筒（返信用の宛名を記入しておいて下さい）

2. 提出先

※賞推薦についての送付先

日本分子生物学会　賞推薦委員長　石川 冬木
〒606-8501　京都市左京区吉田近衛町
医学・生命科学総合研究棟405号
京都大学大学院生命科学研究科　細胞周期学分野
FAX：(075) 753-4197

※ 研究助成についての送付先

日本分子生物学会　研究助成選考委員長　花岡 文雄
〒102-0072　千代田区飯田橋3-11-5
20山京ビル11階
日本分子生物学会事務局気付
FAX：(03) 3556-9611

3. 提出期限

財団等の締切りの1カ月前まで。提出期限後に受取った場合や、提出書類が不備な場合は、選考の対象にならないことがあります。

研究助成一覧

名　称	連　絡　先	件　数	締　切	助成内容等	概　要
第39回三菱財団自然科学研究助成	㈶三菱財団 ☎（03）3214－5754 〒100－0005 千代田区丸の内2－3－1	総額3億円、40件程度	2008年 2月4日	1件当り 2,000万円まで	自然科学の基礎となる独創的、かつ先駆的研究とともに、すぐれた着想で新しい領域を開拓する萌芽ともなる研究（原則として個人研究）。
新化学発展協会2008年度研究奨励金	㈳新化学発展協会 ☎（03）5297－8820 〒101－0041 千代田区神田須田町1－12	7課題、各課題1件	2008年 1月31日	1件　100万円	新化学の発展に資する若手研究者（39歳以下）の研究に対して、研究奨励金を交付。 研究課題有り。
山田科学振興財団2008年度研究援助	㈶山田科学振興財団 ☎（06）6758－3745 〒544－8666 大阪市生野区巽西1－8－1	15件程度（2件）	2008年 3月31日	1件当たり 100～500万円、 総額4,000万円	自然科学の基礎的研究に対しての研究費援助。 〔推薦書は山田財団HPよりダウンロード www.yamadazaidan.jp〕
国際生物学賞	国際生物学賞委員会 ☎（03）3263－1722 〒102－8471 千代田区一番町6 日本学術振興会内	1件 （1件）	2008年＊ 5月18日	賞状、賞牌、 1,000万円	生物学の研究において世界的に優れた業績を挙げ、世界の学術進歩に大きな貢献をした研究者。
第26回研究助成 第25回国内および海外留学補助金 第25回持田記念学術賞	㈶持田記念医学薬学振興財団 ☎（03）3358－7211 〒160－0003 新宿区本塩町7－6 四谷ワイズビル	総額8,000万円 総額1,000万円 2件以内（1件）	2008年＊ 6月30日 2008年＊ 6月30日 2008年＊ 7月31日	1件　100万円 1件　50万円 1件　500万円	生命科学・薬物科学・情報科学と医療応用の研究の分野における研究で、顕著な功績があり、かつ新進気鋭の研究者。
平成21年度笹川科学研究助成	㈶日本科学協会 ☎（03）6229－5365 〒107－0052 港区赤坂1－2－2 日本財団ビル	約350件	募集期間 2008年＊ 10月1日 ～ 10月13日	1件当り100万円まで	人文・社会科学および自然科学（医学を除く）の研究計画に関するもの。4月1日現在、35歳以下の若手研究者へ助成。

名　称	連　絡　先	件　数	締　切	助成内容等	概　要
上　原　賞	㈶上原記念生命科学財団 ☎（03）3985－3500 〒171－0033 豊島区高田3－26－3	2件以内 （1件）	2008年＊ 9月10日	金牌、 2,000万円	生命科学の栄養学、薬学、基礎および臨床医学、社会医学、東洋医学で顕著な業績を挙げ、引き続き活躍中の研究者。
第25回井上学術賞	㈶井上科学振興財団 ☎（03）3477－2738 〒150－0036 渋谷区南平台町15－15－601	5件以内 （2件）	2008年＊ 9月20日	賞状、金メダル、 200万円	自然科学の基礎的研究で特に顕著な業績を挙げた者（ただし締切日現在満50歳未満）。
第17回木原記念財団学術賞	㈶木原記念横浜生命科学振興財団 ☎（045）825－3487 〒244－0813 横浜市戸塚区舞岡町641－12	1件 （1件）	2008年＊ 9月30日	賞状、記念牌、 200万円	最近において生命科学の分野で優れた独創的研究を行っている国内の研究者で、原則として締切日現在50歳以下の者。
畜産技術協会平成21年度委託研究開発課題	㈳畜産技術協会 ☎（03）3836－2301 〒113－0034 文京区湯島3－20－9	ホームページ参照 http://jlta.lin.go.jp	2008年＊ 12月18日	1課題につき2年間で総額500万円以内	食料の自給率向上、安定供給及び農業の持続的発展、農村の振興に資する畜産技術に関連した課題を募集。
平成20年度日産科学賞	㈶日産科学振興財団 ☎（03）3543－5597 〒104－0061 中央区銀座6－16－9	1件 （1件）	2008年＊ 10月15日	賞状、500万円	自然科学分野で、学術文化の向上・発展に大きな貢献をした新進気鋭の研究者。年度により、対象研究分野の指定有り。
住友財団2008年度基礎科学研究助成	㈶住友財団 ☎（03）5473－0161 〒105－0012 港区芝大門1－12－6 住友芝大門ビル2号館	総額 1億3,000万円 100件程度	2008年＊ 6月30日	1件当り500万円まで	理学（数学、物理学、化学、生物学）の各分野及びこれらの複数にまたがる分野の基礎研究で萌芽的なもの。若手研究者（個人またはグループ）を対象とする。
第49回藤原賞	㈶藤原科学財団 ☎（03）3561－7736 〒104－0061 中央区銀座3－7－12	2件 （1件）	2008年 1月31日	副賞1,000万円	わが国に国籍を有し、科学技術の発展に卓越した貢献をした者。
東レ科学技術賞 東レ科学技術研究助成	㈶東レ科学振興会 ☎（047）350－6103 〒279－8555 浦安市美浜1－8－1 東レビル	2件前後 （2件） 総額 1億3,000万円 10件程度 （2件）	2008年＊ 10月10日 2008年＊ 10月10日	1件につき 賞状、金メダル、 500万円 特に定めず最大3,000万円程度まで	学術上の業績顕著な者、学術上重要な発見をした者、重要な発明により効果が大きい者、技術上の重要問題を解決し貢献が大きい者。 今後の研究の成果が科学技術の進歩・発展に貢献するところが大きいと考えられる、独創的、萌芽的な研究を活発に行っている若手研究者（原則として45歳以下）。
第40回科学振興賞 第40回海外学者招へい助成金	㈶内藤記念科学振興財団 ☎（03）3813－3005 〒113－0033 文京区本郷3－42－6 NKDビル8階	1件 （1件） （前期・後期各10件）	2008年＊ 10月1日 2008年＊ 6月1日 10月1日	金メダル、 500万円 1件 20～80万円まで（エリアによる）	人類の健康の増進に寄与し得る自然科学の基礎的研究、自然科学の進歩発展に顕著な功績を挙げた研究者。 同上のテーマに取り組み、国際的に高い評価を得ている外国の研究者を招へいする受入れ責任者に贈呈。
ブレインサイエンス財団研究助成 塚原仲晃記念賞 海外派遣研究助成 海外研究者招聘助成	㈶ブレインサイエンス振興財団 ☎（03）3273－2565 〒104－0028 中央区八重洲2－6－20	8～12件 1件 若干件 若干件	2008年＊ 10月26日 2009年＊ 1月18日	1件 100万円 1件 100万円 1件 30万円まで 1件 30万円まで	ブレインサイエンス研究分野において独創的で国際的評価に値する研究者。 生命科学の分野において優れた独創的研究を行っている45歳以下の研究者。 ブレインサイエンスの研究の促進を図るため、国際学会、シンポジウム等への参加、あるいは研究者の派遣を助成。 同分野において独創的テーマに意欲的に取り組んでいる外国人研究者の招聘を助成。
平成21年度研究助成	㈶長瀬科学技術振興財団 ☎（06）6535－2117 〒550－8668 大阪市西区新町1－1－17	10数件	2008年＊ 11月30日	1件 250万円以内	生化学および有機化学等の分野において研究活動を行う研究者または研究機関。

名　称	連　絡　先	件　数	締　切	助成内容等	概　要
2009年度研究集会助成	㈶ノバルティス科学振興財団 ☎（03）5464－1460 〒106－0031 港区西麻布4－16－13 西麻布28森ビル10F	5～6件 （1件）	2008年＊ 9月30日	1件 50万円	わが国で開催される生物・生命科学およびそれに関連する化学の領域における研究集会に対し、運営経費の一部を助成する。研究集会はかなりの数の国外からの参加者を含む国際性豊かな集会でなければならない。ただし、参加者が1,000名を越すような大規模な研究集会および2国間の研究集会は原則として助成対象としない。
ノバルティス研究奨励金		約45件 指定機関からの推薦必要	2008年＊ 9月14日	1件 100万円	生物・生命科学およびそれに関連する化学の領域における創造的な研究に対して助成。
日本学術振興会賞	㈱日本学術振興会 ☎（03）3263－1762 〒102－8472 千代田区一番町8番地	20件程度	2008年＊ 6月4日 ～6日	賞状、賞碑、 110万円	人文、社会科学及び自然科学にわたる全分野が対象。博士の学位を取得しており、国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により学術上特に優れた成果を上げたと認められた研究者（45歳未満）。
㈶材料科学技術振興財団 山崎貞一賞	㈶材料科学技術振興財団 ☎（03）3415－2200 〒157－0067 世田谷区喜多見1－18－6	各分野 1件	2008年 4月30日	賞状、金メダル、 300万円	授賞対象は、「材料」、「半導体及び半導体装置」、「計測評価」、「バイオサイエンス・バイオテクノロジー」の4分野からなり、論文の発表、特許の取得、方法・技術の開発等を通じて、実用化につながる優れた業績をあげている者。
平成20年度研究助成	㈶光化学技術研究振興財団 ☎（053）454－0598 〒430－0926 浜松市中区砂山町325－6	総額 5,000万円	2008年＊ 8月31日	助成金総額 約5,000万円	光科学に関係する研究に対して助成。対象課題有り。

（　）内は、応募に当たり学協会等からの推薦が必要な場合、本学会の推薦枠を示しています。
＊は、本年度の案内を受取っておらず、昨年の締切日を参考に示してあります。
締切日を過ぎているものは、本年度応募は終了していますが、参考資料として掲載しました。

男女共同参画委員会活動報告

男女共同参画委員会委員長　大隅　典子

1.　BMB2007　男女共同参画ランチョンワークショップ開催報告

【開催の概要】

昨年 12 月 11 日㈫～ 15 日㈯に横浜にて開催された BMB2007 において、男女共同参画企画によるランチョンワークショップの開催（12 月 12 日）、ならびに文部科学省・女性研究者支援モデル事業採択機関を含む 25 機関によるポスター展示とポスター･ディスカッションを行った。講演タイトルを含む開催概要を下記に記す。

Ⅰ．男女共同参画ランチョンワークショップ「アカデミアにおいて研究者人生を楽しむ」
日時：12 月 12 日㈬　12：15 ～ 13：15
会場：パシフィコ横浜　会議センター 3 階 303
第 1 部「アカデミアにおけるキャリアパス形成の課題」（12：15 ～ 12：55）
1）メンター制度についてアメリカに学ぶ（菅裕明／東京大）
2）アカデミアにおけるキャリアパス支援の取組み（有賀早苗／北海道大）
3）アカデミアにおける環境整備（小林和人／福島医科大）
4）子育てと共に研究者人生を謳歌する（北爪しのぶ／理研）
5）理想的な女性研究者像（高橋淑子／奈良先端科学技術大学院大）
第２部　パネルディスカッション「研究者人生を楽しむには」（12：55 ～ 13：15）
1）パネリストとして、第 1 部スピーカーの他、末岡多美子先生（前・コロラド大学教授、「波濤を越えて」著者）のご出席を頂いた。
Ⅱ．文部科学省・女性研究者支援モデル育成事業採択機関等による ポスター展示
日時：12 月 11 日㈫　10：00 ～ 14 日㈮ 18：00
（ディスカッション・コアタイム 12 日 14：00 ～ 14：30）
会場：パシフィコ横浜　展示ホール 1 階

ランチョンワークショップは、副題「アカデミアにおいて研究者人生を楽しむ」が示すように、参加者には明るい未来への希望を抱いてもらう場としたい、という企画趣旨のもと、大学・研究所など「アカデミアにおけるキャリア形成およびポジション獲得」に焦点を絞り、成功例として代表的なパネリストをお招きした。第 1 部は 5 名の先生方のご講演、第 2 部ではパネルディスカッションを行い、多様なキャリアパスをどう実現したら良いか、男女共に再考する機会と成るよう企画した。

ランチョンワークショップ当日には、事前の年会 HP による案内も功を奏して定員 200 名をはるかに超える 300 名程の参加者が集まり、熱気あふれる盛会となった。第 1 部では、各講演者が 7 分という短時間プレゼンの中に創意工夫を凝らして聴衆を引き付け、それぞれの演題に即した経験に基づく強烈な応援メッセージを送っていただいた。第 2 部パネルディスカッションでは、論点としては以下の 3 点、①自分の理想とする研究者人生を歩むためには、②アカデミアにおけるその実現に壁となるもの、③アカデミアにおける「成功」とは、を意識して活発なディスカッションが進められた。質疑の場面では、所属機関での取り組みを開始したい参加者からの具体的な質問もみられた。大隅典子委員長によるスムースな司会進行により盛況のうち時間通りに閉会することが出来、終了後も話題冷めやらぬ、の感があった。

会場アンケートの結果から、20 ～ 30 代の男女を含む若い大学院生･ポスドクの参加が多く、「何となく将来が不安」という参加動機も挙げられていたが、「共感した」、「エネルギーをもらった」、「何かできることから力を併せようと思った」など、良好な感想が大半であった。特に今回の男性パネリストの姿を見て、「女性サイドから働きかけるだけではないことを教えられた」という感想も見られ、今後の男女共同参画のあり方についても再考していただける場にもなったのではないかと、企画委員一同自負している。

また、別会場のポスター展示に於いては、案内状を送付した 25 機関全てから参加を頂くことが出来た。今回初めての試みとしてコアタイムを設定した「ポスター・ディスカッション」開催時には、時間を越えて活発な議論を行う

参加者の姿が多く見られた。近日、これらに関する開催報告を HP 上で公開予定しており、ランチョンワークショップ、ポスター展示における各アンケート集計結果の概要も、順次盛り込む予定である。

【今後の企画について】

ランチョンワークショップ終了後に回収されたアンケートを一覧したところ、今後は下記の内容を充実させることが重要であるとの結論に達した。

Ⅰ．学会員への情報の紹介
　1）制度：現状での制度、労働条件に関する法令、等。
　2）便利情報：利用可能な保育施設、病児保育サポート体制、育休中など在宅時に利用できる情報の紹介（文献検索を含む）、（高齢者等）在宅施設等、現在進行形の情報。
Ⅱ．ネットワークづくりなど共同参画に関する有益な取り組みの紹介
　1）男女共同参画に関する好ましい実例（アカデミアと企業の双方）。
　2）NPO サイト等ボトムアップによる取り組みの紹介（例：子育て支援 NPO 組織）。

上記の結果をふまえ、次年度の合同年会における企画開催計画もすでに検討を始めている。早速、次年度の構成として以下の案がまとまった。より広い会場を準備するなど、今回の参加者からの意見を反映する企画となるよう、細かい内容については今後さらに詰めていく。

開催時間帯としては、学会 2 または 3 日目にお弁当付きのランチョン企画とする。
12：00 ～ 13：30 などの 90 分程度が適当と考えられ、十分な広さがある、次のセッションまでの時間が空いている等、開催場所を考慮する。企画構成案としては、以下の 3 部を予定する。
Ⅰ．第 1 部（基調講演）30 分、15 分× 2 名
　1）制度等の紹介（講演者として省庁関係者）。
　2）大規模アンケート結果の分析報告、現状と今後について（企画委員）。
Ⅱ．第 2 部（現場の声）30 分、10 分× 3 名
Ⅲ．第 3 部（パネルディスカッション）30 分情報の紹介
　第 2、3 部では、企業（製薬など）の方、アカデミアの方など、生の声を聞かせてくださる 3 名の適任者を選ぶこととする。

最後に、本年度のランチョンワークショップ開催にあたりご協力いただいた全ての方々に心から感謝を申し上げると共に、次年度の開催へのご教示も賜りたくお願い申し上げます。

（文責：第 30 回年会企画 WG 座長　本間美和子）

2.　大規模アンケートについて

男女共同参画学協会連絡会による第 2 回「科学技術系専門職の男女共同参画実体調査」が 2007 年 8 月 21 日～ 11 月 20 日まで実施され、14110 名の回答が得られました。日本分子生物学会員からは、2772 名（全会員の約 18%）が、本アンケートに回答していただきました。お忙しいところ、ご協力いただきありがとうございました。また、分子生物学会員によるアンケート結果のみを対象にした回答分析を行うことが BMB2007 会期中に開催された委員会において決まりました。今後、本学会男女共同参画委員（アンケート WG）を中心に、アンケート結果の解析を行い、本学会員の現状や抱えている問題を会員各位に公表する予定です。

（文責：大規模アンケート WG 座長　松尾　　勲）

3.　学協会連絡会関連活動報告

1．第 5 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムの報告書完成

2007 年 10 月 5 日、名古屋大学野依記念学術交流館において、200 名以上の参加をえて盛会のうちに終了した男女共同参画学協会連絡会シンポジウムでしたが、その報告書「真の男女共同参画へ向けて意識を変えよう！」が完成しました。2008 年 2 月中に学協会連絡会ホームページに掲載予定です。

2．第 6 期男女共同参画学協会連絡会がスタート

男女共同参画学協会連絡会の第 6 期がスタートしました。幹事学会は「地球惑星科学連合」。委員長は、中村正人先生（JAXA）。第 6 回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムは、2008 年 10 月 7 日㈫に、京都大学 100 周年記念ホールにて開催予定です。昨年の名古屋にひきつづき、2 度目の東京以外の開催となります。

3．第 2 回「科学技術系専門職における男女共同参画学協会連絡会共同参画の大規模調査」

合計 14,110 名（男性 10,349 名、女性 3,761 名）から返ってきた計 96 項目の設問に対する回答と自由記述欄の解析が作業部会にて進行中（委員長：豊島陽子東京大学教授、委員は生物物理学会、応用物理学会、原子力学会、高分子学会、分子生物学会より参加）。回答者の性別・年齢別・分野別分布等の基本事項の解析と共に、少子化に関連する子育て世代の意識（例えば､持ちたい子どもの数と持ちうる子どもの数のギャップ等）や RPD プログラム等、最近の政府の施策に対する評価について解析が進んでいる状況です。2008 年 3 月までに報告書（概要版）をとりまとめる予定です。

（文責：学協会連絡会運営委員　大坪　久子）

4.　学術振興会・女性審査委員候補者情報のデータベース整備に協力

昨年 12 月、男女共同参画学協会連絡会を介して、日本学術振興会より標記データベース整備作業の協力依頼がありました。その主目的は、科学研究費や特別研究員、国際交流事業を審査する審査委員に占める女性の割合が、研究者全体に占める女性の割合から考えても現状では少ないので、女性審査委員を増やすための選考基準の基となるデータベース作りに協力してほしいといったものでした。

同依頼に対して男女共同参画委員会では、学会として推薦させていただくに相応しい約 30 名の女性会員をリストアップし、理事長の承認を得ました。同推薦手続きに際し、すでに他学会で手続きを終えている会員もおられ、最終的に同意いただいた女性研究者 11 名を、1 月 16 日、女性審査委員候補者情報として男女共同学協会連絡会委員長に推薦しました。ご報告いたします。

（文責：男女共同参画委員会委員長　大隅　典子）

会員管理システムへのアクセスのお願い
（ログインＩＤ・パスワードをご確認ください）

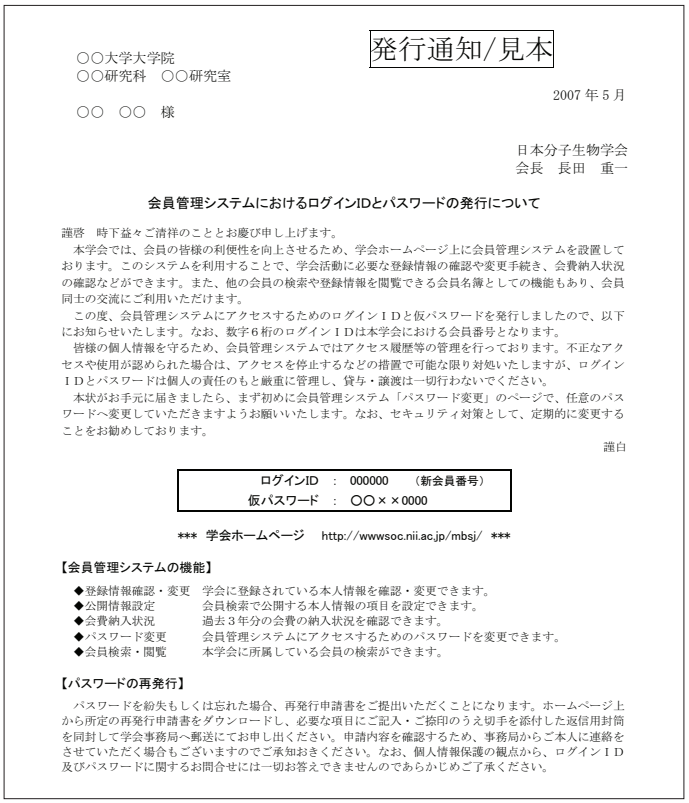
本学会では、会員の皆様の利便性を向上させるため、学会ホームページ上に会員管理システムを設置しております。新会員システムへの移行に伴ない、昨年５月に、ログイン ID（数字６桁の新会員番号）とパスワードを全会員へ発行いたしました。会員各位におかれましては、同システムにアクセス頂き、登録内容などをご確認くださるよう、重ねてお願い申し上げます。

本年６月には第 16 期の理事選挙が行われますが、今回の役員選挙より電子投票システムが導入される予定です（詳細は次号の会報６月号でご案内いたします）。同電子投票の際にも、ログイン ID とパスワードが必要となりますことをお知らせいたします。

新会員システムを利用することで、学会活動に必要な登録情報の確認や変更手続き、会費納入状況の確認などができます。他の会員の検索や登録情報を閲覧できる会員名簿としての機能もございます。今後、当面、冊子版会員名簿の発行予定はありませんので、早めに新会員システムへアクセス頂き、会員名簿としての機能を活用できるように、各自、データ設定をお願いいたします。手順としては、システム画面の「公開情報の設定」を選択し、公開可能な会員情報項目をご自身で設定して頂くようになっております（可能でしたら、是非、ご所属機関を公開項目と設定ください）。初期設定での公開対象項目は、お名前・会員番号・会員種別だけですので、初期設定のまま所属機関で検索された場合、所属機関非公開設定の会員は、検索の対象外となってしまいます。閲覧できるのは会員の方々のみであることを踏まえ、公開とする項目を設定くださるよう、宜しくお願い申し上げます。

会員管理システム URL
〈http://wwwsoc.nii.ac.jp/mbsj/membership/index.html〉

※　昨年５月に以下のとおりのパスワード発行通知をお送りしております。
［新入会者にはその都度、同様のご案内を郵送しております］



発行通知/見本

○○大学大学院
○○研究科　○○研究室

2007 年 5 月

○○　○○　様

日本分子生物学会
会長　長田　重一

会員管理システムにおけるログインIDとパスワードの発行について

謹啓　時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。
本学会では、会員の皆様の利便性を向上させるため、学会ホームページ上に会員管理システムを設置しております。このシステムを利用することで、学会活動に必要な登録情報の確認や変更手続き、会費納入状況の確認などができます。また、他の会員の検索や登録情報を閲覧できる会員名簿としての機能もあり、会員同士の交流にご利用いただけます。
この度、会員管理システムにアクセスするためのログインＩＤと仮パスワードを発行しましたので、以下にお知らせいたします。なお、数字６桁のログインＩＤは本学会における会員番号となります。
皆様の個人情報を守るため、会員管理システムではアクセス履歴等の管理を行っております。不正なアクセスや使用が認められた場合は、アクセスを停止するなどの措置で可能な限り対処いたしますが、ログインＩＤとパスワードは個人の責任のもと厳重に管理し、貸与・譲渡は一切行わないでください。
本状がお手元に届きましたら、まず初めに会員管理システム「パスワード変更」のページで、任意のパスワードへ変更していただきますようお願いいたします。なお、セキュリティ対策として、定期的に変更することをお勧めしております。

謹白

ログインID　：　000000　（新会員番号）
仮パスワード　：　○○××0000

*** 学会ホームページ　http://wwwsoc.nii.ac.jp/mbsj/ ***

【会員管理システムの機能】

◆登録情報確認・変更　学会に登録されている本人情報を確認・変更できます。
◆公開情報設定　会員検索で公開する本人情報の項目を設定できます。
◆会費納入状況　過去３年分の会費の納入状況を確認できます。
◆パスワード変更　会員管理システムにアクセスするためのパスワードを変更できます。
◆会員検索・閲覧　本学会に所属している会員の検索ができます。

【パスワードの再発行】

パスワードを紛失もしくは忘れた場合、再発行申請書をご提出いただくことになります。ホームページ上から所定の再発行申請書をダウンロードし、必要な項目にご記入・ご捺印のうえ切手を添付した返信用封筒を同封して学会事務局へ郵送にてお申し出ください。申請内容を確認するため、事務局からご本人に連絡をさせていただく場合もございますのでご承知おきください。なお、個人情報保護の観点から、ログインＩＤ及びパスワードに関するお問合せには一切お答えできませんのであらかじめご了承ください。

各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ

○理研シンポジウム

第３回バイオ医工学シンポジウム

「再生医療への基盤技術」

ミレニアムプロジェクトとして大きく展開されている再生医療研究によって、基礎的にも応用的にも数々の成果が上がってきております。今回は第三回バイオ医工学シンポジウムとして、特に再生医療のための基盤技術に関して、外部から講演者をお呼びして最近の研究動向を探るとともに、理研での医療工学の取り組みも紹介します。伊藤　嘉浩（㈱理化学研究所　主任研究員）

会　期：平成 20 年 3 月 7 日
会　場：㈱理化学研究所　中央研究所
　　鈴木梅太郎記念ホール

10:00–10:30　「マトリックス結合性成長因子の設計と応用」
　　北嶋 隆（理研・伊藤ナノ医工学）
10:30–11:00　「ケージド細胞培養基板を用いる細胞接着の光制御」
　　宝田 徹（理研・前田バイオ工学）
11:00–11:30　「イオンビーム照射技術を用いた医療デバイスの作成と外科手術支援」
　　鈴木 嘉昭（理研・先端技術開発支援センター・ビームアプリケーションチーム）
11:30–12:00　「粉末積層法による人工骨の三次元成形」
　　山澤 建二（理研・先端技術開発支援センター・アドバンストエンジニアリングチーム）
13:00–13:40　「免疫臓器の人工的構築に向けて―人工リンパ節の構築とその免疫学的機能―」
　　渡邊 武（理研・免疫・アレルギー科学総合研究センター・免疫組織再生ユニット）
13:40–14:20　「幹細胞バンク事業の現状と将来―血液分野における幹細胞応用例の紹介―」
　　中村 幸夫（理研・バイオリソースセンター・細胞材料開発室）
14:20–15:00　「再生医療のための多孔質基盤材料の開発」
　　陳 国平（物質・材料研究機構）
15:20–16:00　「再生医療とＤＤＳ」
　　横山 昌幸（神奈川科学技術アカデミー）
16:00–16:40　「ヒト体性幹細胞を用いた再生医療への技術基盤」
　　梅澤 明弘（国立成育医療センター）
16:40–17:20　「分子間力により自発形成される人工細胞外マトリックス」
　　石原 一彦（東京大学工学系研究科）
18:00–　懇親会（於　理研内・広沢クラブ）

講演会参加費：無料（講演会参加は事前申し込み不要）
懇親会参加費：3000 円（懇親会参加希望の方は 2 月 22 日㈮までに e-mail にて申し込みください。）

主催・問い合わせ先：
〒 351-0198　埼玉県和光市広沢 2-1
㈱理化学研究所　伊藤ナノ医工学研究室
・Fax：048-467-9300
・E-mail： bme_sympo_3@riken.jp
・URL：http://www.riken.jp/r-world/research/symposium/index.html

○遺伝子・デリバリー研究会　第８回シンポジウム

期　日：2008 年 5 月 9 日㈮
場　所：千里ライフサイエンスセンター
　　（〒 560-0082　大阪府豊中市新千里東町 1 丁目 4-2）
講　演：

藤原俊義（岡山大学大学院医歯学総合研究科　遺伝子・細胞治療センター）
「テロメラーゼ活性を標的とするウイルス製剤のがん診断・治療へ の応用」
水野正明（名古屋大学大学院医学系研究科　遺伝子治療学）
「Liposomal Delivery System と細胞」
片岡一則（東京大学大学院工学研究科）」
「遺伝子治療実用化に向けたインテリジェント超分子ナノデバイスの構築」
櫻井和朗（北九州大学大学院国際環境工学研究科）
「抗原提示細胞上のグルカン認識部位である Dectin-1 を標的にした核酸医薬の DDS」
中西真人（産総研バイオセラピューティック研究ラボ）
「持続発現型 RNA ウイルスベクターの開発と応用」
西川元也（京都大学大学院薬学研究科）
「導入遺伝子発現プロファイルの速度論解析に基づく遺伝子デリバリーシステムの最適化」
丸山一雄（帝京大学薬学部）
「バブルリポソームと超音波による GDS・DDS」

一般演題としてポスター発表を募集します。奮ってご応募ください。

詳細スケジュール、一般演題申込、参加登録、参加費

に関しては、遺伝子・デリバリー研究会のホームページ http://www.gene-delivery.org/ をご参照ください。

事務局・問い合わせ先：

〒 558-8585　大阪市住吉区杉本 3-3-138
大阪市立大学大学院工学研究科化学生物系専攻
遺伝子・デリバリー研究会第 8 回シンポジウム
運営実行委員長　長崎 健
entry2008@gene-delivery.org
TEL：06-6605-2696　　FAX：06-6605-2785

○第 11 回マリンバイオテクノロジー学会大会開催のお知らせ

第 11 回マリンバイオテクノロジー学会大会を下記の要領で開催いたします。

会　　期：平成 20 年 5 月 24 日㈯～ 25 日㈰
会　　場：京都大学吉田南総合館北東棟
大会役員：大会会長　　左子芳彦
京都大学農学研究科教授
実行委員長　宮下英明
京都大学人間・環境学研究科准教授
大会事務局：〒 606-8501　京都市左京区吉田二本松町
京都大学大学院人間・環境学研究科
第 11 回マリンバイオテクノロジー学会大会実行委員会：
TEL/FAX：075-753-7928
Mail ：miyashita@hm1.mbox.media.kyoto-u.ac.jp
懇 親 会：開催日　5 月 24 日㈯　18：00 ～ 20：00
場　所　京都大学生協吉田食堂

大会の内容：

1. 一般講演（口頭発表、ポスター発表）
2. シンポジウム（一般）
3. 懇親会

＊シンポジウムの企画を公募致します。シンポジウムの企画をご希望の方は大会事務局までご連絡下さい。

発表形式：

1. 口頭発表：一般講演は質疑含み 15 分
液晶プロジェクター使用
2. ポスター発表：学生を対象とした優秀ポスターの表彰を予定

一般講演のセッション：

1. 微生物　2. 微細藻　3. 海藻・付着生物
4. 魚介類　5. 天然物化学・未利用資源
6. バイオミネラリゼーション　7. マリンゲノム
8. 環境・環境適応　9. その他

発表申込みの締め切り：平成 20 年 3 月 14 日㈮必着
講演要旨の締め切り：平成 20 年 4 月 18 日㈮必着
講演申し込み方法：

発表希望者は書式に従って、申込者氏名・所属および　連絡先、発表希望セッション、希望発表形式、発表者氏名・所属略記（連名の方全員）、演題を明記の上申し込んで下さい。申込みはホームページ経由で受け付けます。詳細は大会ホームページでご確認下さい。

参加登録方法：

参加登録希望者は書式に従って、申込者氏名・所属および連絡先を明記の上、ホームページ経由で申し込んで下さい。詳細は大会ホームページでご確認下さい。

第 11 回大会ホームページアドレス：
http://hawk.kyoto-bauc.or.jp/gakkai/mbt2008/
学会ホームページ：
http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsmb/index.html

その他

○山田養蜂場　みつばち研究助成

2006年、ミツバチのゲノム解読が終了し、ミツバチ研究が世界的に注目を集める中、㈱山田養蜂場本社では、ミツバチ研究のさらなる発展に貢献することを目的として、幅広い分野から最先端の視点や技術を取り入れた創造的な研究の助成を行います。

1. 応募資格

45歳以下の若手研究者、養蜂研究家。

2. 助成研究

ミツバチに関する基礎研究、ミツバチ産品※を始めとした有用天然素材の応用技術開発・予防医学的研究、養蜂技術開発研究。※ミツバチ産品…ローヤルゼリー、プロポリス、蜂蜜、花粉荷、蜂の子、蜂毒など。

3. 助成金額および件数

1件50～1,000万円とし、総額最大1億円（10件程度採用）。

4. 申請書および応募方法

所定の研究計画書等を下記ホームページ（2月中旬公開予定）よりダウンロードし、必要事項をご記入の上ご提出ください。詳細は下記ホームページをご参照ください。

5. 募集期間

2008年2月中旬～4月30日（当日消印有効）

6. 申込・問合せ先

〒708-0393　岡山県苫田郡鏡野町市場194
㈱山田養蜂場本社
みつばち健康科学研究所　みつばち情報センター
TEL：0868-54-1199（研究開発部直通）
FAX：0868-54-3346
e-mail：bee-lab@yamada-bee.com
みつばち健康科学研究所ホームページ：
http://www.bee-lab.jp/

日本分子生物学会　賛助会員一覧

（2008 年 1 月 1 日現在）

アサヒビール株式会社 健康おいしさ研究所
アジレント・テクノロジー株式会社
アトー株式会社 営業開発グループ
アプライドバイオシステムズジャパン株式会社
株式会社アムコ 販売企画部
アムジェン株式会社 製品企画部
株式会社エー・イー企画
海洋研究開発機構 図書室
科学技術振興機構 研究基盤情報部バイオインフォマティクス課
科研製薬株式会社 研究開発本部総合研究所
協和発酵工業株式会社 バイオフロンティア研究所
株式会社コクサン
コスモ・バイオ株式会社 開発部
産業技術総合研究所 北海道センター図書室
ジャスコインタナショナル株式会社 第二事業部営業課
住友化学株式会社 農業化学品研究所探索生物グループアグリバイオ
生化学工業株式会社 機能化学品営業部原体・試薬ビジネスユニット
第一化学薬品株式会社試薬統括部テクノサポートセンター学術グループ
第一三共株式会社 創薬基盤研究所
タカラバイオ株式会社 バイオインダストリー部
田辺三菱製薬株式会社 研究本部研究推進部加島推進グループ
中央精機株式会社
東洋紡績株式会社 ライフサイエンス事業部
株式会社トミー精工
ナカライテスク株式会社 技術営業部広報課
日本甜菜製糖株式会社 総合研究所第二グループ微生物
日本ベクトン・ディッキンソン株式会社 BD サイエンス
日本たばこ産業株式会社 たばこ中央研究所
日本たばこ産業株式会社 植物イノベーションセンター
浜松ホトニクス株式会社 システム事業部特機営業部
ヒゲタ醤油株式会社 研究開発部
富士写真フイルム株式会社 ライフサイエンス事業部
富士レビオ株式会社 研究開発部門研究支援グループ
フナコシ株式会社
三菱化学株式会社 イノベーションセンター
ヤマサ醤油株式会社 R&D 管理室
ロシュ・ダイアグノスティックス株式会社 AS 事業部
湧永製薬株式会社 湧永満之記念図書館
和研薬株式会社 大阪センター営業推進部

＜ 50 音順＞

The Molecular Biology Society of Japan NEWS

日本分子生物学会 会報

（年3回刊行）

第 89号 （2008年2月）

発　行――特定非営利活動法人　日本分子生物学会

代表者――長田　重一